

# 事象の事態把握における日本語の 〈プロセス体験志向〉表現について

— 対応する英語の〈結果分析志向〉表現との  
対比の観点から —

尾 野 治 彦

## 目 次

- |  |  |
|--|--|
| 1 はじめに —〈見え〉の事態把握<br>としてのプロセス志向 —                | 4 「～かかる」「～うとする」「～そ<br>うだ」「ところ」—「瞬時」のプ<br>ロセス体験 — |
| 2 「始める」「～出す」—「開始」<br>のプロセス体験 —                   | 4.1 「～かかる/～かける」                                  |
| 2.1 「始める/始まる」                                    | 4.2 「～うとする」                                      |
| 2.2 「～出す」  | 4.3 「～そうだ」                                       |
| 3 「続く」「つづいて」「ている」<br>「つつある」—「継続・進行」の<br>プロセス体験 — | 4.4 「ところ」  |
| 3.1 「続く」   | 4.5 まとめ  |
| 3.2 「つづいて」「つぎからつぎへ」<br>「つぎつぎに」                   | 5 「途中」—「途中」のプロセス体<br>験 —                         |
| 3.3 「ている」  | 6 結び—「道」とプロセス志向<br>—                             |
| 3.4 「つつある」                                       |  |

## 1 はじめに

### —〈見え〉の事態把握としてのプロセス志向—

日本語表現のプロセス志向と英語表現の結果志向は、よく指摘されることではあるが、次の(1)は、「対応する「行為の動詞」で日本語と英語の間に意味的な差が認められる場合、図式的に言うと、日本語の動詞は〈行為〉の表示のみにとどまるのに対し、英語の動詞は〈行為〉+〈結果の達成〉を表示する」(池上 1981: 268) ことを示すものとしてよく引用される例である。

(1) a. 燃ヤシタケレド、燃エナカッタ

\*I burned it, but it didn't burn.

b. 沸カシタケレド、沸カナカッタ

\*I boiled it, but it didn't boil.

c. 船ヲ浮カベタケレド、浮カバナカッタ

\*I floated the boat, but it didn't float. (池上 1981: 266)

このような例についての日本語と英語の違いについて野村(2002: 52)は、「行為の目的達成を、到達点を目指しての場所の移動として比喩的に考えてみると、英語と日本語の差は到達点を〈固体〉スキーマで処理し、明確な輪郭をもった場所として理解するか、到達点を〈連続体〉スキーマで処理し、明確な輪郭を有しない場所として理解するかに求められる。前者の場合は移動が到達点に達したかどうか明瞭に判定できるのに対して、後者の場合はどの段階で到達点に達したか必然的に不確定的となる」としているが、このことについては、むしろ、「……〈有界的〉(bounded)よりも〈無界的〉(unbounded) —あるいは、〈結果中心〉(goal-oriented)よりも〈過程中心〉(process-oriented) —に傾斜するという振舞い方での特徴も、実は日本語の話し手が臨場的なス

タンスで事態把握する傾向が強いということと密接な関連があるように思える。行為の過程に身を置いた当事者にとっては、自らの行為が意図した結果を生むところまで行くか、行かないかは量り知る術もないわけである（下線部筆者）」（池上 2005：53）との見方のほうが、このことについての本質をより言い当てているようにも思われる<sup>1)</sup>。

先に尾野（2012：5）では、日本語を次のように特徴づけた。

(2) 日本語は、〈見え〉を体験する範囲で表現する言語である。

しかし、そもそも、「場面内視点」（濱田 2011）における日本語の視座は、あくまで、語りの現場にあるので、「〈見え〉の体験」とは、あくまで、語りの場で進行しつつある事象に対する語り手の一瞬の知覚・感覚体験であるということになる。そうであれば、日本語表現は、おのずと、「行為」や「事象」の現場の一瞬であるプロセスを捉えた「プロセス体験志向」表現につながるということになる。よって、次のように言えると思われる。（以下では、「行為」も「事象」に含めることにする。）

(3) 日本語は、「事象」の〈見え〉を体験によって把握する言語であるため、「プロセス体験志向」表現となりやすい。

よって、「燃やしたけど、燃えなかった」の「燃やした」は、あくまで、語りの基準時における「燃やす」という行為に対する体験のみを表し、結果を意味しえない場合もあり得るために、後半に「燃えなかった」という記述があっても何ら矛盾しないということになる。

一方、「場面外視点」（濱田 2011）の英語においては、視座は、現場の時を離れた場面外にあるために事象のすべてを見渡すことができ、そのため、把握の対象となるのは、日本語の場合におけるような語りの現場

で〈見え〉の体験として捉えられた事象ではなく、客体化された「全体の事象」である。そうであれば、事象全体は、分析的に把握されやすく、結果の把握に焦点がいきやすくなるといえる。つまり、英語表現が「場面外視点」であれば、おのずと、「結果分析志向」表現につながるということになり、次のように言えると思われる。

- (4) 英語は、「全体の事象」の結果を分析的に把握する言語であるため、「結果分析志向」表現となりやすい。

よって、“I burned it, but it didn't burn.”における“I burned it”は、結果として「燃えた」事象を意味するため、後半で、“but it didn't burn.”と述べることは、矛盾することになる。

要するに、事象を時の流れに沿ったミクロの視点で述べるのが日本語であり、全体を視野に入れたマクロの視点で述べるのが英語ということになる。一瞬のミクロの視点での把握が「プロセス体験志向」につながり、全体を把握するマクロの視点が「結果分析志向」につながるということである<sup>2)</sup>。

さて、本稿で扱う日本語の「プロセス体験志向」表現と英語の「結果分析志向」表現であるが、このテーマ自体はきわめて広範囲なもので、表現の種類も多岐にわたるが、先にあげた(1)の「〈行為〉」と「〈行為〉+〈結果の達成〉」の対比や、次の(5)(6)のような動作動詞と状態動詞の対比の事例は、よく引き合いに出される例である。

- (5) She is suddenly awake in the middle of her worst nightmare.  
彼女は悪夢の最中に突然、目が覚めた。(影山 2002 : 29)
- (6) ゆうだちのように、おゆがふってきた。みると、くじらだ。かばのからだについていたあわが、どんどんきえて ながれていく。

(『おふろだいすき』)

When we turned around, there was a whale! Thanks to his shower all the bubbles on the hippopotamus' body and mine were gone in no time. (I Love to Take a Bath : 26)

ちなみに、(5) (6) のような事例についても、日本語で動作動詞が好まれるのは、動詞が表す進行する事象が、現場での一瞬の〈見え〉として体験されやすいからであり、英語で状態動詞が好まれるのは、状態動詞が事象の結果を表しやすいからであると説明されよう。

しかし、先の (1) の日英語の対比の例や、(5) (6) の動作動詞・状態動詞の対比の例は、事象そのものがプロセスや結果を表しているのであって、事象のある局面だけを表すプロセス表現とその対応英語表現を問題にしたものではない。本稿のねらいは、事態把握の日本語のプロセス体験志向、英語の結果分析志向を論じるにおいて、進展する事象における特定のプロセスの局面のみを表す表現を取り上げ、対応英語表現と対比することにある。

具体的には、「開始」、「継続・進行」、「瞬時」、「途中」の4つの局面について、特定の日本語表現が、事象のプロセスを体験的に把握するために使用されるが、結果分析的な対応英語表現では、これらの事象のプロセス体験は、分析的な把握対象としては捉えにくいことを、実例をもって示すことになる。

結局、「プロセス志向」と「結果志向」は、日本語表現の「体験性」と英語表現の「分析性」という特質と密接に関わっているのであり、この点において、本稿は、「やがて」や「S1 と、S2」を扱った尾野 (2008a, 2008b, 2011)、「顔」「表情」「色」といった「視覚的体験名詞」を扱った尾野 (2012)、更には、「視覚表現」「感覚・感情表現」「共感表現」を扱った尾野 (2014) といった一連の日本語の「体験性」に関わる表現とその対

応英語表現を論じてきたこれまでの研究の延長上に位置づけられるものである。

## 2 「始める」「～出す」——「開始」のプロセス体験——

まずは、語り手が場面密着であり、事象の変化を体験できるとすれば、事象の開始の局面には、事象の全体を把握する分析的な英語よりは、より敏感であることが予想されることになる。つまり、場面密着の体験志向であれば、開始のプロセスを意義あるものと捉え、その開始のプロセスをより知覚体験しがちになるのではないのか、ということである。開始点を表す「始める」と「～出す」について、その対応英語表現と比べてみよう<sup>3)</sup>。

### 2.1 「始める/始まる」

まず、「はじめる」の例をみてみよう。もちろん、次の例のように、日本語と英語で、「始める」と‘begin’や‘start’が対応する例のほうが一般的であることは言うまでもない。

- (7) そらまめくんは じぶんの ベッドに みずを いれはじめました。  
(『そらまめくんとめだかのこ』:22)

Big Beanie began filling his bed with water.

(*Big Beanie and the Lost Fish* : 24)

- (8) みんなは、たのしそうに つづきを かきはじめました。  
(『くれよんのくろくん』)

The other crayons started happily to draw again.

(*Blackie, the Crayon* : 18)

- (9) Then both began to talk— (The Moneychangers : 370)  
やがて二人はたがいに話しはじめた。

(『マネーチェンジャーズ (下)』: 182)

(10) ..., and immediately I jumped out of bed and began to dress—

(*The Great Gatsby* : 93)

……ぼくは即座にとび起きて身支度をはじめた —

(『グレート・ギャツビー』: 242)

もっとも、「始める」と ‘begin’ や ‘start’ は、全く同じ意味を表すということではない。英語の ‘begin’ や ‘start’ は、過去の完了した事象を振り返って述べているのに対し、日本語においては、語りの現場で、語り手の事象の開始に対する知覚体験が述べられているという「臨場感」が感じられる。さらに言えば、英語においては、動作主の「行為の開始」の意味合いしか感じられないが、場面密着の日本語においては、動作主が現場の状況と密着しており、「状況の開始」といったニュアンスが感じられる。これは、体験的把握においては、動作主があくまで場面に含まれたものとして存在しているためと考えられる。

さらに、日本語では「始める」が用いられていないのに、逆に、対応英語表現では ‘begin’ が用いられている例もいくつか見受けられる。

(11) スーホは、はをくいしばって、つらいのをこらえながら、馬にささっているやを、ぬきました。 (『スーホの白い馬』)

Gritting his teeth, Suho began pulling out the arrows, one at a time. (*Suho's White Horse* : 38)

(12) Outside, it began to snow. (*Badger's Parting Gifts*)

その夜、雪がふりました。 (『わすれられない おくりもの』)

とはいえ、実際の用例としては、日本語では「始める」が用いられているが、対応英語表現ではそのようになっていない例のほうがはるかに

多い。

まずは、日本語原文で、「始める」が用いられているが、英訳では 'begin' や 'start' が用いられていない例である。

- (13) やがて、行手にぼつりあかりが一つ見え始めました。

(『手ぶくろを買いに』：12)

Eventually, they noticed a small point of light on the path ahead.

(*Buying Mittens* : 12)

- (14) いえが おおしく ゆれたかとおもうと、まるで そらいろのはなびらが ちるように、やねも かべも まども、くずれはじめました。

(『そらいろのたね』：25)

The whole house shook violently and then fell apart, roof, walls and windows.

(*The Sky Blue Seed* : 25)

- (15) やがて あまぐもが さり、くもの きれまから ゆうぐれのひざしが さしはじめる。

(『あるはれたひに』)

Finally, the big rain clouds went on their way, and some rays of sunshine poked through.

(*One Sunny Day...*)

- (16) その向こうにも、方々から炎が上がり始めている。

(『凍える牙』：11)

The fire now had free range;

(*The Hunter* : 8)

- (17) 貴子は、コートの襟を立てて、足早に歩き始めた。

(『凍える牙』：324)

She turned up the collar of her coat and walked quickly ahead.

(*The Hunter* : 170)

- (18) 炬燵に入り直して、照子は再び考え始めた。(『凍える牙』：433)

Setting back into the warmth of the kotatsu, Teruko reconsidered.

(*The Hunter* : 227)



- (19) ……工業地帯の明かりもぼやけて見え始めた。  
(『凍える牙』：482)  
The lights of the industrial-district now blurred.  
(*The Hunter* : 251)
- (20) 追いつがるように田中と侍と西とは最後の声をあげた。それをふり棄てて輿はふたたび進みはじめた。(『侍』：306)  
'Please...!' the Japanese pleased for the last time. The cortège ignored them and moved forward. (*The Samurai* : 199)

次は、逆のパターンとして、英語原文には「始める」を意味する表現がないのに対し、日本語訳では、「始める」が用いられて訳出されている例である。

- (21) The winter days came, and when the first snow fell...  
(*Frederick*)  
ふゆが きて、ゆきが ふりはじめた。(『フレデリック』)
- (22) Frederick cleared his throat, waited a moment, and then, as if from a stage, he said: (*Frederick*)  
フレデリックは せきばらいして、ちょっと まってから、ぶた  
いの うえの はいゆうみたいに しゃべりはじめた。  
(『フレデリック』)
- (23) But the train gave a sudden lurch and started moving. We were on our way home. (*The Polar Express*)  
しかしそのとき汽車はがたと揺れて、動き始めた。帰りの旅が始まったのだ。(『急行「北極号」』)
- (24) The next morning, the door to his heart opened and the Bluebird sang, ... (*The Robot and the Bluebird*)

つぎの あさ、むねの とびらを あけて、あおいことりが うたいはじめました。  
(『ロボットとあおいことり』)

- (25) “I’m far too busy to help,” cried Little Mouse, and he ran off to pick some daisies.  
(*The Very Busy Day*)

「ダメ。ぼく、とーっても、とーっても、いそがしいの」  
チビねずくんは、やねにのぼって、ひなぎくをつみはじめました。  
(『チビねずくんのあつ—いいちにち』：8)

- (26) ...and she watched the apples turn red and ripen.  
(*The Little House* : 8)

……りんごのみは じゅくして、あかく なりはじめます。  
(『ちいさいおうち』：8)

- (27) Thunder crackled all around them, and cold hard rain beat down upon them.  
(*Elmer and the Dragon* : 12)

かみなりが、空いちめん、なりひびきました。そして、つめた  
い、大つぶの雨が、たたきつけるように、ふりはじめました。  
(『エルマーとりゅう』：24)

- (28) He spoke into the telephone again...  
(*Hotel* : 2)  
彼はまた電話でしゃべりはじめた。(『ホテル(上)』：7)

少なくとも、これらの日本語の例について言えることは、「始める」によって、現場の状況をも含めた事象の開始のプロセス体験が感じられるということである。一方、英語が結果分析志向であるとすれば、把握対象は事象全体となりがちであり、事象の開始には、日本語ほどは、焦点がいきにくいと説明されよう。また、(25) についていえば、英語原文では、“he ran off to pick some daisies” と to 不定詞で目的が述べられた分析的表現が、「つみはじめました」と体験的な日本語に訳出されていることが注目される<sup>4)</sup>。

## 2.2 「～出す」

「はじめる」と「～出す」については、森田(1986:644)は、「「～始める」は終わりが予想できる一つの継続行為の開始に、「～出す」は、新事態の成立(瞬間作用)にしばしば用いられる」としている。また山梨(1995:107)は、「雨が降り始めた/降り出した」、「本を読み始めた/読み出した」はどちらも容認可能であるのに対し、「?その本を読み出さない」や「?早く食べ出そう」においては、「～出す」の容認性が下がることから、「「～出す」が起動相のアスペクトの表現に使えるのは、基本的に問題の行為が知覚可能で自然発生的な事態にかかわっている場合である」(下線部筆者)としている。

「知覚可能で自然発生的な事態」とは、まさに、〈見え〉として捉えられ、事象の変化のプロセスに敏感であればこそといえる。「～出す」は、日本語独自の表現であると思われるが、これは、「～出す」の把握対象があくまで、〈見え〉としての現場の事象そのものであることが関わっているように思われる。

とはいえ、「～出す」も先の「始める」のように、「開始」の意味も表し、「～出す」に‘begin’や‘start’が対応している場合も少なくない。

- (29) みいちゃんは、てのなかで あったかくなった おかねを わたして、ぎゅうにゆうを うけとると、ぱっと かけだしました。

(『はじめてのおつかい』:26)

Miki handed the storekeeper her two warm coins, took the milk and started to run home. (*Miki's First Errand*:26)

- (30) He started to sing and to dance the tarantella.

(*The Three Little Wolves and the Big Bad Pig*)

ブタは うたを うたい、タンバリンをもって おどりだしました。

(『3びきのかわいいオオカミ』:28)

とはいえ、「始める」の場合のように、そのような対応関係にはない例のほうがはるかに多い。

まずは、日本語の「～出す」に対して、英訳では開始点が表されていない表現になっている例である。

- (31) とんでいく くもの あいだから、あおいそらも みえだした。

(『うみのがくたい』：8)

The men could see the blue sky peeping out from between the flying clouds. (The Ocean-Going Orchestra : 9)

- (32) 「ちょっと しつれい。あさごはんは、はらっばで」と、たんぼぼのはっばをちぎって、むしゃむしゃ たべだしました。

(『ぐりとぐらとくるりくら』：13)

“Excuse me, I’ll have my breakfast now!” Swinging over to a patch of dandelions, he plucks some leaves and munches them up. Munch munch, crunch crunch.

(Guri and Gura’s Magical Friend : 12-13)

- (33) とこちゃんは、そのまに とことこかけだして――

(『とこちゃんはどこ』：3)

Toko began to pitter-patter and then wander away.

(Where is Little Toko? : 3)

- (34) やがて、ぴかくんは もとどおり、あお・き・あか・あお・き・あか……と、うごきだしました。(『ぴかくんめをまわす』：25)

Phew! Sidney is back to normal: GREEN-YELLOW-RED, GREEN-YELLOW-RED. (Sid the Signal : 25)

- (35) 豆太は、子犬みたいにくらだをまるめて、おもて戸をからだでふっとばして走りだした。

(『モチモチの木』『モチモチの木』：74)

Mameta leaped up and shot out the front door, running as fast as he could. (The Tree of Courage : 21)

- (36) ポケットの中でポケベルが震え出した。 (『凍える牙』: 228)

His cellphone was vibrating. (The Hunter : 121)

- (37) なにも言わずに、二人は部屋の方へ歩き出した。 (『雪国』: 15)

..., and the two of them walked off silently toward his room.

(Snow Country : 15)

- (38) 村の川岸、スキイ場、社など、ところどころに散らばる杉木立が黒々と目立ち出した。 (『雪国』: 60)

Cedar groves stood out darkly by the river bank, at the ski ground, around the shrine. (Snow Country : 62)

これらの例の中でも、特に (31) の「みえだした」や (38) の「目立ち出した」の知覚表現には、現場の時の推移が伴った知覚体験が感じられる。

次は、逆のパターンとして、日本語訳に「～出す」が用いられている例である。

- (39) ...Conrad got awfully mad. (Earl the Squirrel)

……コンラッドは、火のようにおこりだしました。

(『子リスのアール』)

- (40) And when he told them of the blue periwinkles, the red poppies in the yellow wheat, and the green leaves of the berry bush, ...

(Frederick)

そして フレデリックが、あおい あさがおや、きいろい むぎのなかの あかい けしや、のいちごの みどりの はっぱのことを はなしたすと、…… (『フレデリック』)

- (41) Miss Merriweather jumped up from her chair and ran down the hall. (*Library Lion*)  
 メリウェザーさんは、いすから とびあがると、ろうかへ かけ  
だしました。 (『としょかんライオン』)
- (42) “Uncle Jim, Uncle Jim!” cried Jack. (*Jack’s New Boat*)  
 「おじさん、ジムおじさん！」ジャックはなきだした。  
 (『ジャックの新しいヨット』)
- (43) There they waded ashore and waddled along till they came to the highway. (*Make Way for Ducklings*)  
 かもたちは、やっこら やっこら きしにあがり、  
 おおどおりにむかって 一れつにならんで あるきだしました。  
 (『かもさんおとおり』)
- (44) They stop. They laugh.  
 They laugh. They dance. (*The Happy Day*)  
 みんな とまった。みんな うっふっふっ、  
 わらう、わらう。おどりだす。 (『はなを くんくん』)
- (45) Number four elevator was acting up again. (*Hotel* : 355)  
 四号エレベーターが、またむずかりだした。  
 (『ホテル(下)』：241)
- (46) Ten minutes later Rickards got to his feet and said it was time to get home. (*Devices and Desires* : 326)  
 十分後、リカーズは立ち上がって、そろそろ帰るといいだした。  
 (『策謀と欲望(下)』：100)

「始める」にせよ、「～出す」にせよ、これらの用例は、現場での変化しつつある事象を語り手が体験として捉えた、語り手の現場での体験性が現れた表現であるといえる。一方、対応英語においては、あくまで、

事象全体の結果が述べられているだけで、開始のプロセス表現は、日本語ほどは、用いられないということである。

### 3 「続く」「つづいて」「ている」「つつある」

#### ——「継続・進行」のプロセス体験——

「はじめる」「～出す」は、事象の変化のプロセスの開始の把握に焦点がおかれた表現だが、時の推移を体験できる日本語においては、事象の「進行・継続」のプロセスも、〈見え〉の対象となり、事象の意義ある局面として捉えられ、「体験的把握」の対象となる場合があることは十分考えられよう。「続く」「つづいて」「ている」はそのような表現であると考えられる。一方、事象が完了したものとして把握する結果志向の英語であれば、当然、語りの現場での事象の「継続・進行」のプロセスは捨象されやすく、日本語ほどは、分析的把握の対象とはならないのではないかと予想される。

#### 3.1 「続く」

まずは、「続く」である。もちろん、日本語の「続く」については、英語でも keep～ing、continue といった対応表現が用いられることのほうが一般的であることは言うまでもない。

(47) あさえは、かながえ、かながえ、ずっとかながえつづけました。

(『いもうとのにゅういん』：18)

Naomi kept thinking and thinking until she had a great idea.

(*Naomi's Special Gift* : 18)

(48) “Wild Island is practically cut in two by a very wide and muddy river,” continued the cat. (*My Father's Dragon* : 7)

「どうぶつ島のまん中には、ひろい、どろ水の川がながれてい

て、島は、まっぶたつにわかれています。」と、ねこは、はなし  
をつづけました。 (『エルマーのぼうけん』：16)

もつとも、‘keep~ing’や‘continue’と「続ける」にはニュアンスの違いがある。‘keep~ing’や‘continue’はあくまで、事象の「継続」が、「始める」「出る」の対応英語表現のように、いわば、終了した事象の結果として捉えられたものである。実際、(47)の英訳には、結果志向表現であることを示すuntilが表れている。これに対し、「続く」には、語りの場で進行しつつある、進行・継続のプロセスに対する「現場性」が感じられる。

とはいえ、実際の用例においては、「続く」と‘keep~ing’や‘continue’が対応関係にない例もかなり見受けられる。まずは、日本語原文での「続く」が英訳されていない場合である。

(49) ……今日も今日とてレストランの関係者からの聞き込みを続けながら、貴子を空気のように無視し続けた。 (『凍える牙』：88)

Again today, while continuing to interview the witnesses in the hospital, he had ignored her, as if she were thin air.

(*The Hunter* : 50)

(50) この時期は毎日、小やみなく雨がふりつづく。 (『侍』：89)

During this season the rains fell incessantly every day.

(*The Samurai* : 65)

(51) 船と舟との間に問答がしばらく続き、やっと彼はすべてを了解した。 (『侍』：348)

After a brief exchange of words between the two vessels, the officer finally grasped the entire situation.

(*The Samurai* : 226)



- (52) 二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。  
(『こころ』：28)

On our way back, we walked for a while in silence.  
(*Kokoro* : 19)

- (53) 父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。  
(『こころ』：115)

My father's condition remained the same for a week or so.  
(*Kokoro* : 102)

- (54) 私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。  
(『こころ』：252)

I did not cease to blame myself for K's death. (*Kokoro* : 236)

- (55) ……余りに真赤な顔が剥き出しになったので、駒子も自分ながら  
楽しげに笑い続けた。  
(『雪国』：61)

The face underneath was a brilliant red. She was quite  
delighted with herself. (*Snow Country* : 63)

- (56) 博士は決して急かさなかった。じっと考え続ける私と息子の顔を見つめるのを、何よりも愛した。(『博士の愛した数式』：7)

He didn't press us. On the contrary, he fondly studied our expressions as we mulled over the problem.

(*The Housekeeper and the Professor* : 3)

これらの例では、まず、(50)の「毎日」、(51)の「しばらく」、(53)の「一週間以上」、(54)の「いつまでも」のように、「続く」が期間を表す表現と共に用いられていることが注目されるが、これは、体験的把握においては、現場での〈今〉と共に事象も更新され、この体験が「続く」で表されていると考えられる。一方、英語では、把握の原点としての〈今〉は現場にはないため、期間を示す場合に、状態的な内容を表す動詞は結

果としての期間の意味合いを含意したものとなっており、あえて、「続く」を付け加える必要はないと考えられる。更に、(51)の‘after’が用いられた“After a brief exchange”や、(54)の‘not’が用いられた“did not cease to blame”のような結果・分析的な表現になっていることも注目されよう。

次は、逆のパターンとして、英語原文では、「続ける」に相当する表現はないのに、日本語訳では、「続ける」が付け加えられた例である。いわば、原文にはない、現場での進行・継続体験の意味合いが、「続く」によって付け加えられているのである。

(57) They ran all the way to Toad’s house.

(*Frog and Toad Together* : 49)

がまくんの いえまで はしり つづきました。

(『ふたりはいっしょ』: 49)

(58) ...and they too danced all night in the moonlight.

(*The Rabbits’ Wedding*)

あかるい つきのひかりのなかで ダンスは ひとばんじゅう つづきました。

(『しろいうさぎとくろいうさぎ』)

(59) And the Bluebird lived in his heart *always*.

(*The Robot and the Bluebird*)

ええ、あおいことりは ロボットの むねに すみつづきました とも。

(『ロボットとあおいことり』)

(60) But still the rain came down. Until at last...

(*Jack’s New Boat*)

だけど、あめはふりつづくばかり。そうして ついに……

(『ジャックのあたらしいヨット』)

(61) The rain fell all morning.

(*Farfallina & Marcel*)

朝のあいだ ずっと 雨がふりつづいていました。

(『ファルファリーナとマルセル』)

- (62) She remembered the bookstalls lined against the old stone wall above the banks of the river. (*The Moon Was the Best*)

セーヌがわの きしべに ならぶ ほんやです。いしがきのまえに たてかけた ちいさな みせが つづきます。

(『パリのおつきさま』)

- (63) The top floor's corridor was wide, lushly appointed, and led in only one direction—toward a huge set of oak doors with a brass sign. (*The Da Vinci Code* : 163)

最上階の通路は幅が広く贅沢な造りで、ただひとつの方向へ——真鍮の標示板がついたオーク材の大きな扉へとつづいていた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (上)』: 277)

- (64) There was a long pause. (*The Da Vinci Code* : 240)

長い沈黙がつづいた。 (『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 112)

ここの日本語訳でも、(58)の「ひとばんじゅう」、(61)の「朝のあいだ」のような期間を表す語に「続く」が用いられて訳出されていることは、先の(50)(51)(53)(54)の期間表現と共に「続く」が用いられた日本語原文が、「続く」の意味合いがなく英訳されているのと対応しているといえる。また、(64)の英語原文での“was a long pause”の状態表現の結果表現が、「長い沈黙が続く」と事象に訳出されていることは、先の(55)の「続く」が用いられている事象表現が、状態表現が用いられた結果表現に英訳されていることに対応しよう。

ちなみに、(50)の「小やみなく雨がふりつづく」、(60)「あめはふりつづくばかり」、(61)の「雨がふりつづいていました」のように、「雨」と「続く」の共起が注目されるが、これは、現場での雨のプロセス体験

の継続の強調のためと思われる。

また、(62)の「ちいさな みせが つづきます」や(63)の「最上階の通路は……大きな扉へとつづいていた」のような、静止的な事象に用いられている「つづく」は、現場での視点の移動という語り手のプロセス体験によるものと考えられる。

少なくとも、現場視点においては、〈今〉の事象の先にある終結点はみえるはずもなく、進展する事象のただ中にいる語り手にとって、眼前で進展している事象が「続く」と感じられるのは自然なことであるといえる。このことについては、「もし到達点が輪郭の不定な連続体的なイメージ・スキーマとして捉えられているならば、時間的に進行する行為がどの時点で到達点に達したかの確認も事実上困難になり、行為は果てしなく続く〈無界的〉なものを受け止められる」との池上(2009:430)の見解も参考になろう。

### 3.2 「つづいて」「つぎからつぎへ」「つぎつぎに」

次の「つづいて」「つぎつぎに」「つづけざまに」等の表現も、現場で連続して生じる事象が体験的に述べられたものである。

もちろん、次のように、英語でも対応表現がある例があることはいうまでもない。

(65) それから そらまめくんは くるひも くるひも ベッドを みはっていました。 (『そらまめくんのベッド』:22)

From then on, day after day, Big Beanie watched his bed.

(*Big Beanie's Bed* : 22)

(66) Frog and Toad ate many cookies, one after another.

(*Frog and Toad Together* : 32)

ふたりは つぎつぎに たくさん たべました。

(『ふたりはいっしょ』: 32)

とはいえ、‘day after day’、‘one after another’における‘after’は、すでに終了したことを基準にしての結果分析的な意味合いがあるのに対し、「くるひもくるひも」「つぎつぎに」には、語りの現場において、進行している時の推移にそっての事象の体験が語られているニュアンスが感じられる。

しかし、このように対応表現がある場合よりは、ない場合のほうが多い。まずは、日本語原文で、「つづいて」「つぎからつぎへ」「つぎつぎに」等の語句が用いられている例である。

- (67) つづいて、ほかの さかなも、みんな ひろい ひろい うみの  
どこかに、かえっていった。 (『うみのがくたい』: 25)

And after them went all the other fishes. They all disappeared  
somewhere into the broad, wide ocean.

(*The Ocean-Going Orchestra* : 25)

- (68) ところが、つづいて、「ぴんぼーん、ぴんぼーん」と なりました。  
た。 (『はじめてのおるすばん』: 23)

But then it rang again, and, finally, a third time.

“Ding-dong! Ding-dong!” (*Ding-Dong!* : 22)

- (69) みているまに、つぎからつぎへ、ちいさなシャボンだまが、たく  
さんできた。 (『おふろだいすき』)

As we watched, the seal shot many, many little bubbles out  
into the air. (*I Love to Take a Bath* : 15)

- (70) みあげるような おおなみが、つぎつぎに とびかかってきて、  
ふねを うえへしたへと ふりまわした。

(『うみのがくたい』: 7)

Huge waves towered high above the ship. The boat rose and fell with the waves. (*The Ocean-Going Orchestra* : 14)

- (71) さて、それから がくたいは、しているかぎりの おんがくを、つぎからつぎへと えんそうした。(『うみのがくたい』: 14)  
The orchestra played all the music it knew.

(*The Ocean-Going Orchestra* : 14)

- (72) もりじゅうの どうぶつも、あとから あとから やってきます。  
(『そらいろのたね』: 18)

All the animals of the forest came too. There was no end to them.

(*The Sky Blue Seed* : 18)

- (73) たまには書物をあけて十ページもつづげざまに読む時間さえ出てきた。  
(『こころ』: 118)

Sometimes, I had even time enough to read ten pages of a book without interruption.

(*Kokoro* : 105)

- (74) 三原は、つぎつぎと慎重にめくった。さらに五枚目ぐらいのあたりで、彼は思わず、叫びをあげるころだった。あった!

(『点と線』: 168)

He continued checking the forms carefully. He leafed through a few more, and suddenly, he almost cried out in disappointment. It was there! (*Points and Lines* : 104)

ここでは、現場での事象の連続性と繰り返しが体験されているのである。これらの対応英語表現の例では、(67) と (68) の「つづいて」の対応英語表現が、‘after them’ や ‘finally’ の結果志向表現であることが注目される。特に、(68) の ‘finally’ は、尾野 (2008a, 2008b, 2011) で論じた、次の (75) の例と同じように考えられる。

- (75) やがて町にはいりましたが…… (『手ぶくろを買いに』: 18)  
Finally, the little fox came to the village.  
(*Buying Mittens* : 19)

つまり、「つづいて」は、「やがて」が現場での時の進行を表すように、現場の時点での事象の進行を表しているが、結果志向の英語では、時の経過の場合のように、事象の経過のプロセスは捨象され、結果のみが‘finally’で表されていると考えられる。

また、注目されるのは、「つぎからつぎへ」や「つぎつぎに」で表される複数回の事象が、(69)の‘many, many little bubbles’、(70)の‘huge waves’のように、複数名詞で表現されているということである。また、(72)の「あとからあとから」という回数表現が、‘no end to them’や、(73)の「つづけざまに」が、‘without interruption’のように、否定表現が用いられていることも注目される。否定表現のほうが、分析的で抽象の度合いが高いことはいままでもない。また、(74)では、「つぎつぎに」の対応英語表現として、‘continued checking’が用いられているが、この表現には、現場での事象の臨場的で連続的なニュアンスは感じられない。

次は、日本語訳に「つぎつぎに」等の語句が訳出されている例である。

- (76) Halibut Jackson made suits for everybody. (*Halibut Jackson*)  
すると いろんなひとが つぎから つぎに、ふくを つくって  
ほしいと やってきました。 (『カクレンボジャクソン』)
- (77) ..., and Grandma took out all the get-well cards people had sent her.  
(*The Best Present*)  
……おばあちゃんは、いろいろな人からもらった病気おみまいの

カードを、つぎからつぎへ、とりだしました。

(『いちばんすてきなプレゼント』：23)

- (78) This caused some of the leaves to be torn from their branches and swept up in the wind, tossed about and dropped softly to the ground. (The Fall of Freddie the Leaf)

葉っぱはこらえきれずに吹きとばされ まき上げられ つぎつぎ  
と落ちていきました。(『葉っぱのフレディ』)

- (79) Look at the streetlight. The snow is falling in front of it. It may fall all night. (Snow is Falling : 4)

そとのあかりを みてごらん。ゆきが つぎつぎと おちてい  
く。こんやは つもりそうだ。(『あっ！ゆきだ』：2)

- (80) Outside, in bright, warm sunshine, airport limousines and taxis were discharging passengers who had traveled south—as he himself had done—on the breakfast jet flight from New York. (Hotel : 85)

暑い外の照りかえしの中では、空港のリムジンやタクシーが、オキーフェと同じようにニューヨークを早朝に発って南部へ旅行にきた乗客を、ぞくぞく降ろしていた。(『ホテル(上)』：127)

- (81) “Bingo.” Langdon began racing through slides now— (The Da Vinci Code : 101)

「ビンゴだ」それからラングドンはつぎつぎスライドを入れ替えた。(『ダ・ヴィンチ・コード(上)』：174)

- (82) Another boat started tossing small explosive charges into the water to drive the fish away from the area.

(Without Remorse : 5)

べつの艇が小型爆薬筒をつぎつぎに海中に放り込んで、その水域から魚群を追い出しにかかった。(『容赦なく(上)』：13)



- (83) Even the traffic lights were in her favor. One changed to green in such a timely fashion that her foot didn't even have to touch the brakes. (Without Remorse : 7)
- 信号も快調だった。じつにタイミングよくつぎつぎに青に変わるので、ブレーキに足をかけることさえなかった。
- (『容赦なく(上)』: 15)

ここにおいても、(76)の'suits'、(77)の'all the get-well cards'、(78) 'some of the leaves'、(80) 'passengers'、(81) 'slides'といった複数名詞表現が、「つぎからつぎに」等によって回数表現で訳出されていることが注目される。英語原文にはない、連続する事象に対する体験性が新たに日本語訳に読み込まれているのである。

### 3.3 「ている」

「ている」には多くの用法があるが、ここでは、英語の進行形との対応関係がある進行・継続を表す用法に限定する。まず、「ている」が何を表すのかには諸説があるが、本稿での観点からは、「ている」を、「管理されているデキゴト情報を「観察」によって見いだすという（通常は仮想的な）体験」と捉えた定延（2006：191）や、「観察する時間幅——物理的時間ではなく認知的・心理的時間——が拡大され、発話者・観察者の注目度が高いことが表現され、そこに、ルやタとの違いがあると考えられる」と捉えた池上・守屋（2009：99）の見解で十分であると思われる<sup>5)</sup>。

問題は、なぜ、「ている」が、日本語で多用されるのかということであるが、このことについても、「体験的把握」においては、語りの現場での〈今〉が絶えず、更新されるということから説明されると思われる。つまり、終結点が見えない「プロセス」志向であれば、語りの〈今〉

の基準時も絶えず更新されることになり、一瞬一瞬の〈今〉における、事象の観察・確認に焦点がいくことが自然になるためと思われる。

もちろん、日本語の進行の「ている」と英語の～ing が平行する事例もあることは言うまでもない<sup>6)</sup>。

(84) はげしい雨が降っている。 (「驟り雨」『驟り雨』：118)

It was raining hard.

(“A Passing Shower” *The Bamboo Sword* : 42)

(85) Frog and Toad were reading a book together.

(*Frog and Toad Together* : 42)

かえるくんと がまくんは いっしょに 本を よんで いました。 (『ふたりはいっしょ』：42)

とはいえ、ここにおいても微妙なニュアンスの違いがあるといえる。‘be～ing’においては、あくまで、全体としての事象を視野に入れた上で、過去のある基準時における観察を述べているといったニュアンスがあるのに対し、日本語においては、終結点が存在せず、まさに、語りの〈今〉の現場で進行する事象を観察する臨場感が感じられる。

もっとも、「テイル」に対しては、‘be～ing’が対応しない場合のほうかはるかに多い。これは、英語は結果分析志向であるため、先の「続く」の場合のように、事象の‘～ing’形で表される一瞬一瞬のプロセスの局面が捨象される場合のほうが、より一般的なためと思われる。

また、先で扱った、継続を表す「続く」は、(61)の「雨がふりつづいていました」や(63)の「オーク材の大きな扉へとつづいていた」のように、「ている」形と共に用いられやすいが、これは、「続く」も「ている」も、現場で進行する事象に対する体験を表す点では共通しており、現場で流れる時の経過に対する体験へのこだわりが、「続いている」の語の

多用につながっていると思われる。

まずは、「つづく」と「ている」が一緒になって、「つづいている」となっている例を追加しておきたい。

まずは、日本語が原文の場合で、対応英語訳には、そのようなニュアンスがない場合である。

- (86) それでも、犬の声だけはかなり遠くなるまで聞こえ続けていた。

(『凍える牙』：274)

..., the sound of barking still rang in his ears.

(*The Hunter* : 145)

- (87) ……そばで一助、大助はいぎたなく眠り続けていた。

(『侍』：229)

Beside him Ichisuke and Daisuke were fast asleep.

(*The Samurai* : 151-152)

- (88) 警護の侍たちが二人、先頭を歩いている。その背後に、数珠つなぎになった三人が続いていた。

(『沈黙』：205)

Two samurai, acting as guards, were walking in front. Behind them followed three prisoners bound to one another by chains.

(*Silence* : 131)

- (89) エフ博士は宇宙船に乗って、星から星へと旅をつづけていた。

(「博士とロボット」『きまぐれロボット』：47)

Dr. F. traveled from planet to planet in his rocket.

(“The Doctor and the Robot” *The Capricious Robot* : 28)

次は、日本語訳に「つづている」が用いられているが、英語原文には、継続のニュアンスがない場合である。

- (90) Mount Everest is a younger mountain. It is still sharp and craggy. And it is still being pushed up higher.

(*How Mountains Are Made* : 29)

エベレスト山はまだわかい山です。けわしくとがって、ごつごつしているし、いまもまだのびつづけています。

(『山は生きている』 : 29)

- (91) Already it had been fourteen hours. (*Hotel* : 376)

そんな状態がすでに十四時間もつづいている。

(『ホテル(下)』 : 272)

- (92) And yet, I sensed that the real heat remained inside my father, a slow, destructive fire that had never stopped burning.

(*Into the Web* : 135)

にもかかわらず、ほんとうに熱いのはむしろ父の内側で、そこでは小さな凄まじい炎がけっして消えることなく燃えつづけているようだった。

(『蜘蛛の巣のなかへ』 : 179-180)

- (93) They had concealed a natural chasm which led under the rock.

(*The Adventures of Tom Sawyer* : 213)

これをとりのけると、その下に自然にできた裂け目があって、それが岩の下のほうにつづいていた。

(『トム・ソーヤーの冒険』 : 307)

以下は、「続く」以外の動詞と用いられた「テイル」の用法である。

- (94) かなえは、そのことばかり かんがえていました。

(『とんことり』14)

Maya could think of nothing else. (*Gifts from a Mailbox* : 14)

- (95) ゆうやけで、うみは ももいろや、みどりいろに かがやいてい

た。 (『うみのがくたい』：22)

The sea glowed pink and green in the setting sun.

(*The Ocean-Going Orchestra* : 22)

- (96) つぎのひの あさ、みんなが めを さますと あおぞらが ひろがっています。 (『そらまめくんとめだかのこ』：2)

When everybody got up the next morning, the wide sky was clear blue.

(*Big Beanie and the Lost Fish* : 4)

- (97) 学生は、いかにも無邪気に貴子を見ている。 (『凍える牙』：71)

The student stared at her with frank fascination.

(*The Hunter* : 40)

- (98) ふかい沈黙のなかでベラスコは膝に手をおいたまま、うなだれていた。 (『侍』：315)

In the heavy silence, Velasco rested his hands on his knees and let his head droop.

(*The Samurai* : 205)

- (99) 開け放した窓から夜気が流れこんでいる。 (『侍』：333)

Night air poured through the open window.

(*The Samurai* : 217)

- (100) 先生は笑っていた。 (『こころ』：79)

Sensei laughed,...

(*Kokoro* : 67)

- (101) 道は凍っていた。村は寒気の底へ寝静まっていた。駒子は裾をからげて帯に挟んだ。月はまるで青い氷のなかの刃のように澄み出ていた。 (『雪国』：74)

The road was frozen. The village lay quiet under the cold sky. Komako hitched up the skirt of her kimono and tucked it into her *obi*. The moon shone like a blade frozen in blue ice.

(*Snow Country* : 77)

この中でも、(94)の「ている」の対応英語表現に、‘nothing else’という否定表現が用いられていることが注目されるが、否定表現はあくまで、結果・分析的な表現である。

次は、これとは逆に、英語原文では、完了した事態として結果・分析的に捉えられているのに、日本語訳で「ている」が用いられ、現場での進行する事象として体験的に捉え直されている例である。

- (102) On Christmas morning my little sister Sarah and I opened our presents. (The Polar Express)

クリスマスの朝、妹のサラとぼくは、ふたりでプレゼントの包みをあけていた。(『急行「北極号」』)

- (103) In the room a fly flew lazily this way and that. (The Lying Carpet : 53)

部屋のなかでは、ハエがぐるぐる飛んでいます。(『ほらふきじゅうたん』: 53)

- (104) Now the Sun was setting and the sky was red as blood and fire. (The Lying Carpet : 64)

太陽はしずみはじめ、空は血のように赤くもえていました。(『ほらふきじゅうたん』: 64)

- (105) They all wanted to know what the excitement was about. (Fly High Fly Low : 53)

みんなして、どんなにすばらしいことがおこっているか知りたがっています。(『とんで とんで サンフランシスコ』: 53)

- (106) A happy school of little fish lived in a corner of the sea somewhere. (Swimmy)

ひろい うみの どこかに、ちいさな さかなの きょうだいたちが、たのしく くらしてた。(『スイミー』)

- (107) Pop loved to play chess with Mr. Hoffman.  
(*When Everybody Wore a Hat*)  
父には、ホフマンという 友だちがいて、ふたりは よくチェ  
スをしていた。 (『みんなぼうしをかぶってた』)
- (108) And so, for the last twenty years I'd lived in a small town in  
northern California, where I taught English at a little board-  
ing school that rested, jewellike, by the sea.  
(*Into the Web* : 9)  
その結果、過去二十年、ぼくは北カリフォルニアの小さな町に  
住み、海のそばに宝石みたいに建っている、小さな寄宿学校で  
英語を教えていた。(『蜘蛛の巣のなかへ』: 18)
- (109) A windblown summer rain swept in the next morning.  
(*Into the Web* : 46)  
翌朝は吹きなぐるような夏の雨が降っていた。  
(『蜘蛛の巣のなかへ』: 64)

(109) の「夏の雨が降っていた」については、先の、(50) の「小やみなく雨がふりつづく」や (61) の「雨がふりつづいていました」のように、「雨」が継続的に体験されていることが注目される<sup>7)</sup>。

また、中村 (1991) は、「ていた」の過去進行形には、「余情感」を感じさせるとしているが<sup>8)</sup>、その要因として、「ている」の表す「事象の観察」があげられると思われる。心に留めておきたい事象であればこそ、その事象の観察・確認行為につながるといえよう。

### 3.4 「つつある」

「つつある」については、「している」が「動きの進行」を表すのに対し、「しつつある」は、「変化の進行」を表すとする副島 (2007) の見解に

従う。

「している」には、‘be~ing’ という直接的な対応英語表現が存在するが、「つつある」については、直接的な対応英語表現が存在しない。このことについては、「つつある」の表す「変化の進行」は現場の時の流れを含む事象の進行を表すために、事象の「変化の進行」そのものは、「結果分析的」把握によっては捉えられず、あくまで、現場で体験的にしか把握できないためと思われる<sup>9)</sup>。

「つつある」は、次のように、英訳では、‘be~ing’ で処理されることが多い。

(110) ……父の病気の危篤に陥りつつある旨をもつけ加えたが、……

(『こころ』：122)

I explained as briefly as possible that my father's condition was becoming more and more critical. (Kokoro : 109)

(111) 私はおもむろに近づいた。帰りつつあるという感じが育って行った。

(『野火』：134)

As I approached it the feeling grew within me that I was returning to a place where I had already been.

(Fires on the Plain : 189)

しかし、以下のように、「つつある」が‘~ing’ では、処理されない例も多い。

(112) 父は、死病にかかっていることをとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気がつかなかった。

(『こころ』：116)

My father had known for some time that his disease was



fatal. But when at last death was very close, he seemed unable to recognize it. (*Kokoro* : 103)

- (113) 明るさは急速に増しつつあった。 (『野火』: 68)

It was almost full daylight when I reached the forest ahead. (*Fires on the Plain* : 94)

- (114) 臭気が、私自身の汗の臭いに似た臭気が、近づきつつあった。 (『野火』: 139)

An unpleasant smell, like that of my own perspiration, approaches. (*Fires on the Plain* : 196)

- (115) 野火へ向い、あの比島人がいるところに行きつつある。 (『野火』: 173)

I am on my way to the prairie fires, to the place where the Filipinos live. (*Fires on the Plain* : 242)

- (116) ところがその間に、東京の空気の方は微妙に変って来つつあった。 (『山本五十六(上)』: 103)

However, there had been a subtle change in the atmosphere at home in the meantime. (*The Reluctant Admiral* : 47)

- (117) しかし、日本海軍の上層部が大勢としてその考えに順いつつあったかという、事情は逆であった。 (『山本五十六(上)』: 207-208)

It would be wrong, however, to assume that this way of thinking was general among the upper echelons of the Japanese navy. (*The Reluctant Admiral* : 90-91)

次に、英語原文に対し、対応日本語表現が「つつある」となっている例をみてみよう。

- (118) Poor girl, she did not know how fast she was nearing trouble herself. (The Adventures of Tom Sawyer : 135)  
 かわいそうにベッキーは、彼女自身もまた刻一刻危地に近づきつつあるのを知らなかった。(『トム・ソーヤーの冒険』：190)
- (119) Notwithstanding the doctor's prophecy, I am rapidly recovering strength, ... (Wuthering Heights : 298)  
 医者 of 予言とは相違して、僕はぐんぐん元気を取り戻しつつある<sup>10)</sup>。(『嵐が丘』：497)
- (120) That afternoon was advancing rapidly, and a richer tone was growing on the sun. (The Grapes of Wrath : 25)  
 午後は足早にすぎつつあり、太陽には熟した色合いが生まれていた。(『怒りの葡萄(上)』：46)
- (121) The Western Land, nervous under the beginning change. (The Grapes of Wrath : 150)  
 西部の土地は、いまはじまりつつある変化におびえていた。(『怒りの葡萄(上)』：292)
- (122) The “might” was even a chillier horror than the ghostly laughter, it so confessed a perishing hope. (The Adventures of Tom Sawyer : 198)  
 「かもしれない」という言葉は、幽霊のような笑い声よりも、もっと不気味で恐ろしかった。それは、希望がうしなわれつつあることを物語っていた。(『トム・ソーヤーの冒険』：283)
- (123) ..., I thus drew steadily nearer to that truth, by whose partial discovery I have been doomed to such a dreadful shipwreck: that man is not truly one, but truly two. (The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde : 92)  
 ……すなわち、人間は実は単一の存在ではなくして二元的な存

在であるという真理に、着々と近づきつつあった。

(『ジーキル博士とハイド氏』：91)

英語原文での‘be～ing’形や現在分詞形の‘～ing’形が、「つつある」と訳される場合が多いが、(123)のように、原文に‘～ing’がない場合でも、「つつある」が用いられる場合もある。

結局、「つつある」に直接英語対応表現が存在しないということは、「変化の進行」の現場での「変化」は、結果分析的には把握されにくい性質のものであるということになろう。

#### 4 「～かかる」「～うとする」「～そうだ」「ところ」

##### —「瞬時」のプロセス体験—

これまでプロセス志向体験として、「始める」「～出す」の「開始」のプロセス体験、「続く」「つづいて」「ている」「つつある」の「継続・進行」のプロセス体験を見てきたが、プロセス志向体験としては、「～しかかる/かける」「～うとする」「～そうだ」「ところ」といった事象の「瞬時」のプロセス体験を表す表現がある。これらの瞬時のプロセスは、まさに、場面密着の体験的把握で、一瞬一瞬の事象を体験できればこそ可能な表現であるといえる。一方、分析的把握の英語においては、現場で進行する一瞬のプロセスを捉えることはむずかしいため、これらが表す日本語表現に、1対1で対応する英語表現は存在しないのではないかと予想される。

以下、これらの日本語表現と対応英語表現を比較検討していきたい。

##### 4.1 「～かかる/～かける」

この「～かかる」と「～かける」の意味については、本稿の観点からは、森田(1986：292)の「～かかる」未成立の動作や変化が実現へと一

歩移る状態を表す、「～かける」動作や状態に入り始める意を添える」の見解で十分であると思われる。

要するに、「～かかる」にせよ、「～かける」にせよ、「実現という新たなプロセスへの移行」を表すのである。この観点から、「～かかる/かける」と対応英語表現を比較してみよう。

まずは、日本語原文に「～かかる/かける」が表れている場合とその対応英語表現をみてみよう。

- (124) オオカミの わらいごえを きいて、ヤギは おもわず、『オオカミみたいな すごみの ある ひくい おこえで。』と いいかけたが、しつれいだと おもい、くちを とじる。

(『あらしのよるに』)

The goat was just about to say: Your voice sounds like a wolf's, low and gruff. But he thought this might be rude, so he decided against it. (One Stormy Night...)

- (125) すこし かえりかけた オオカミは たちどまって ヤギを ふりかえる。

(『あるはれたひに』)

The wolf turned to go up his own path, but then stopped and looked back. (One Sunny Day...)

- (126) 「ほんただ、おいら、よく あのへんに……。」えさを たべに いきますよと いいかけて、オオカミは あわてて くちを ふさいだ。

(『あるはれたひに』)

“Yeah, look at that. That’s where I go with the other fellers from the pack and...” Get ourselves tasty snacks, was what the wolf was about to say, but he stopped himself, and his mouth snapped shut. (One Sunny Day...)

- (127) 多美は何か言いかけてやめ、そのかわりのように小さく溜息を

ついた。 (『竹光始末』『竹光始末』: 44)

Tami began to say something, but she thought better of it and let out a small sigh instead.

(“The Bamboo Sword” *The Bamboo Sword* : 31)

- (128) 立花はギョツとして振り向いた。優子は妖しい瞳をこちらへ向けて微笑している。

「きみ、どうしてそれを?……」

言いかけた時、優子は運転手に、「発車オーライ」とおどけた調子で言い、さっと離れていった。 (『戸隠伝説殺人事件』: 135)

Tachibana turned in astonishment. She was looking at him with an enigmatic smile. “How did you know that?” he asked, but she merrily signaled to the driver to go ahead, and moved away from the car.

(*The Togakushi Legend Murders* : 112)

- (129) 既に夜になりかかっている。 (『侍』: 22)

Night had already settled in upon the city.

(*The Samurai* : 21)

- (130) (私が何をしたのでございますか) 声は咽喉まで出かかったが侍は抑えた。 (『侍』: 401)

What did I do wrong? The words rose to the samurai's throat, but he held them back. (*The Samurai* : 260)

- (131) そのときすうっと霧がはれかかりました。

(『英語で読む銀河鉄道の夜』: 220)

When the mist finally began to lift...

(『英語で読む銀河鉄道の夜』: 215)

Just then, the mist began to drift aside, revealing what looked like a highway leading to some important place, lined with a

row of small electric lamps.

(『銀河鉄道の夜 (講談社英語文庫)』: 85)

これらの日本語原文における「～かかる/かける」は、現場の一瞬において、「実現という新たなプロセスへの移行」を表すのであるが、対応英語表現ではそのニュアンスは十分に伝えられていない。

まず、(124) (126) (127) (128) の「言いかける」の表現である。(124) (126) の対応英語表現では、‘be about to’ が用いられているが、ここで ‘to do’ で述べられる内容は発話時点では実現していないことを意味し、これは、「～かかる」の持つ、部分的にでも新たなプロセスにすでに移行しているという意味とは相いれない。(127) は、‘began to say’ が用いられているが、「～かかる」は「移行のプロセス」を表しているのであり、「開始」を表しているのではない。これは、(130) の ‘rose to’ にもいえることである。また、(128) の「言いかけた」に対しては、‘he asked’ が用いられているが、この英訳では、「言いかけた」の途中で終わったニュアンスを表していないことになる。(125) の「すこしかえりかけたオオカミ」に対する “The wolf turned to go up his own path” は、「帰るために向きを変えた」という分析的な表現であって、これでは、瞬時にせよ、「帰るという事態」が生じた現場での臨場性は表されていない。(129) の「夜になりかかっている」に対する “Night had already settled in ...” では、「すでに夜になっていた」ことを表し、部分的にしか夜になっていないことが伝えられていない。結局、英語には、「～かける/かかる」が表す「新たな事象のプロセスに移行した」という事象の瞬時的な把握を表す対応表現が存在しないと言っていいように思われる。

次は、逆に、日本語訳に、「～かける/かかる」が用いられている例である。

- (132) Mrs. Mallard stepped out to cross the road.  
(*Make Way for Ducklings*)  
マラードおくさんが どうろを よこぎり かけました。  
(『かもさんおとおり』)
- (133) “I want to be …” Alexander stopped.  
(*Alexander and the Wind-Up Mouse*)  
「ぼくは……」アレクサンダは いいかけて やめた。  
(『アレクサンダとぜんまいねずみ』)
- (134) “Too late,” he thought, and with a heavy heart he went to his hole in the baseboard. (*Alexander and the Wind-Up Mouse*)  
「おそかった、」かれはおもった。おもい ところで かれは かべの したの あなへ もどりかけた。  
(『アレクサンダとぜんまいねずみ』)
- (135) When they came to the dry rocky slopes of Blueland the sun was low on the horizon, ... (*The Dragons of Blueland* : 57)  
『そらいろこうげん』の、いわだらけの山についたころには、お日さまは、もう、山のむこうにしずみかけていました。  
(『エルマーと16ぴきのりゅう』: 93)
- (136) Elmer and Flute sadly started back through the pines.  
(*Elmer and the Dragon* : 40)  
エルマーとフルートは、がっかりして、まつばやしの中を、もどりかけました。  
(『エルマーとりゅう』: 69)
- (137) Then abruptly, rounding a curve, he saw the real reason for the delay.  
(*Hotel* : 320)  
しかし、やがてゆるやかなカーブにさしかかったとき、車の交通の渋滞の真因がはっきり見えた。  
(『ホテル(下)』: 189)
- (138) The plane was over land again when a flash of enlightenment

struck him. (The Da Vinci Code : 342)

飛行機がふたたび大地にさしかかったとき、啓示の光が急にひらめいた。  
『ダ・ヴィンチ・コード (下)』: 7)

(139) Uncertainly, he tried to reach the zipper from his chair.

(The Moneychangers : 239)

彼は迷いながらも椅子に座ったままジッパーに手をのぼしかけた。  
『マネーチェンジャーズ (上)』: 352)

英語原文は、(132) の目的を表す to 不定詞の目的を表す分析的な構文であったり、(135) (138) のような be 動詞を用いた結果状態表現であったりとまちまちである。しかし、日本語訳の「～かかる/～かける」では、語り手が、現場の事象に臨場して、新たな事象への移行の一瞬を捉えたことを表しているのである。

#### 4.2 「～うとする」

「～うとする」は、「事態や動作が実現する直前であることを表す」(『日本語大辞典』講談社、1995年)の意味であるが、まず、日本語原文での「～うとする」とその対応英語表現をみてみよう。

(140) ぐらが えりまきを はずして、かけようとすると——もうまっしろな えりまきが かかっています。

(『ぐりとぐらのおきゃくさま』: 13)

Gura takes off his scarf and goes to hang it up. But a long, snow-white scarf is already hanging from the hook!

(Guri and Gura's Surprise Visitor : 15)

(141) でっかいかばを、すっかりあらって、おゆをかけようとしたとき、おふろのなかから、いせいのいいこえがきこえた。



(『おふろだいすき』)

I had scrubbed him thoroughly and was about to wash away the bubbles when we heard a loud voice from the bathtub.

(*I Love to Take a Bath* : 24)

- (142) ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

(『英語で読む銀河鉄道の夜』 : 214)

Giovanni could hardly contain his tears.

(『英語で読む銀河鉄道の夜』 : 211)

Giovanni had a hard job to avoid bursting out crying.

(『銀河鉄道の夜』(講談社英語文庫) : 83)

- (143) 病室から出ようとするときに、笑子が「やーい」と言うのが聞こえた。

(『凍える牙』 : 282)

But just before he got out the door he heard Emiko say, “Hey!”

(*The Hunter* : 149)

- (144) 雪のせいで渋滞している道路をのろのろと走り、ようやく病院に戻ったのは、午前九時になろうという頃だった。

(『凍える牙』 : 338)

She crawled along roads jammed with traffic because of the snow, finally getting back to the hospital at 9:00.

(*The Hunter* : 177)

- (145) 店の前で峰岸がタクシーを拾ってくれた。

「先生、どうぞ」

「や、ありがとう」

礼を言い、立花が車に乗り込もうとした時、見送る学生たちの中から野矢優子が駆け寄ってきた。(『戸隠伝説殺人事件』 : 135)

In front of the restaurant, Minegishi hailed a taxi for Tachibana. Tachibana thanked him, and was just getting in

when, from among the students seeing him off, Yuko Noya rushed up to him. (*The Togakushi Legend Murders* : 112)

- (146) 入口のドアを押そうとすると、ひょっこり、若い女が横から来てかち合いになりました。 (『点と線』: 236)

As I was about to open the front door a young girl approached from the side and we almost collided.

(*Points and Lines* : 148)

- (147) 続いてあとから私がいり、同じく傘を預けようとすると、店の子は同伴だと思ったのか、二つの傘をいっしょに紐でくくって一枚の番号札をくれました。 (『点と線』: 236)

I followed and handed over my umbrella also. The waitress, taking us for a couple, quickly tied the two umbrellas together and offered me the check. (*Points and Lines* : 148)

これらの対応英語表現として注目されるのは、まず、(140)の目的を表す to 不定詞の表現、(142)の ‘hardly’、‘a hard job’、(143)の ‘just before’ とした分析的表現であるが、これらの表現は、そもそも、「～うとする」が表す現場で進行しつつある瞬時のプロセスとは無縁のものである。また、(141) (146) で用いられている ‘be about to’ については、この英語表現が、「まさに……するところである」(『Wisdom 英和辞典』2013年)の意味であり、「～うとする」とほぼ同じ意味を表しているようにもとれる。しかし、「～うとする」は、「まさにそうする寸前」(森田 1986 : 747)を表しており、現場の事象の実現の緊迫性の度合いは、‘be about to’ よりもはるかに高いといえる。

特に、興味深いのは、(146) と (147) でどちらも同じ訳者によるものでありながら、一方では ‘be about to’、一方では、結果としての過去形が用いられているということであるが、これは、「～うとする」に 1 対

1で対応する表現が英語には存在しないということを意味しよう。また、(144)の「午前9時になろうという」が表わす新たな事態に移ろうとする微妙なニュアンスは英訳では無視されている。結局、「～うとする」の「実現直前の一瞬」の意味合いは、現場密着の体験的把握であればこそ可能なのであり、結果志向の分析的把握ではこの意味合いを表すことはむずかしいということになる。

次は、逆に、日本語訳に、「～うとする」が用いられている例である。

- (148) He backed up to the hole, stuck his tail down and through the ring, and pulled. Nothing happened.

(*Elmer and the Dragon* : 50)

りゅうは、うしろむきになって、あなのところにちかづく、しっぽをさげて、わなの中にとおしました。それから、もちあげようとしました。はこは、びくともうごきません。

(『エルマーとりゅう』: 87-88)

- (149) He tried to pass into the tunnel, ...

(*The Dragons of Blue land* : 24)

りゅうは、小さいりぐちから、ほらあなにもぐりこもうとしました。

(『エルマーと16ぴきのりゅう』: 44)

- (150) The young Negro was rising from the floor, his face bloody.

(*Hotel* : 38)

黒人の青年は、顔を血だらけにして立ちあがろうとしていた。

(『ホテル(上)』: 61)

- (151) Gorgeous and slender, she had moved to the doorway, preparing to leave.

(*The Moneychangers* : 219)

美人でスタイルのよい彼女は、部屋から出て行こうとして、戸

口まで行っていた。(『マネーチェンジャーズ(上)』:320)

- (152) Langdon asked, watching Sophie edge the speedometer over a hundred kilometers an hour. (*The Da Vinci Code* : 182)

速度計の数字が時速百キロを超えようとしているのを見つめながら、ラングドンは尋ねた。

(『ダ・ヴィンチ・コード(中)』:15)

- (153) Silas stepped quickly forward to take the stone, and as he did, the man on crutches lost his balance.

(*The Da Vinci Code* : 300)

シラスは急いで近寄ってキー・ストーンを奪おうとしたが、その刹那、男がバランスを崩した。

(『ダ・ヴィンチ・コード(中)』:216)

- (154) The chartered turboprop was just passing over the twinkling lights of Monaco when Aringarosa hung up on Fache for the second time. (*The Da Vinci Code* : 339)

チャーターしたターボプロップ機が光のまたたくモナコ上空を通過しようとしているころ、アリンガローサはファーシュとの二度目の通話を終えた。(『ダ・ヴィンチ・コード(中)』:282)

- (155) Now, like a house of cards, it was collapsing in on itself... and the end was nowhere in sight. (*The Da Vinci Code* : 340)

それがいま、トランプの家さながらにみずからの重みで崩れようとしている。とはいえ、終焉のきざしは見あたらなかった。

(『ダ・ヴィンチ・コード(中)』:284)

これらの例では、(153)の英語原文が目的を表すto不定詞が用いられた分析的な表現になっているのが、日本語訳では、「～うとする」を用いて、臨場的・体験的に述べていることが注目される。また、(148)の

過去形や、(150) (154) (155) の進行形や (152) の知覚構文は、すでに事象が実現していることを表すのであるが、あえて、「～うとする」と日本語訳されたのは、臨場的・体験的に把握されたためである。

### 4.3 「～そうだ」

「～そうだ」にはいくつかの意味用法があるが、本節で扱うのは、「動作・作用の開始や状態の変化についての判断を表す」(『大辞林』三省堂、1988年)、「視覚的にキャッチできる動きや変化が生起する直前状態と状況を見て取るときに」(森田1986:595)に用いる「そうだ」である。

次の例をみてみよう。

- (156) すとーぶは、いまにも きえそうでした。

(『ねずみのおいしゃさま』:15)

The stove was about to go out ... (*Dr. Mouse's Mission* :15)

- (157) ……ブルブルは すっかり としを とって いまにも しにそうに なっている ムクムクを みつけました。

(『やさしいライオン』:24)

Quiver went there and looked and looked until he found old Tubby, who was cold and nearly dead.

(*The Gentle Lion* :25)

- (158) 無精髭の顔が一瞬泣きそうに歪んだのを、拓植の妻女はみてしまった。

(「竹光始末」『竹光始末』:15)

His face crumpled, and for a moment she thought he was going to break down and weep, but he soon brought himself under control.

(“The Bamboo Sword” *The Bamboo Sword* :12)

- (159) 滝沢は、まだ何か言いたそうな顔をしていましたが、は虫類のような目を幾度か瞬かせると、すっと前を向いてしまった。

(『凍える牙』：121)

Takizawa looked as if he would have liked to say more; but then, blinking several times, he turned his cold, reptilian eyes away and faced forward again. (*The Hunter* : 68)

- (160) 昨年、この部屋に越してきたのも、雪でもちらつきそうな曇り空の日だった。

(『凍える牙』：174)

The day she moved into this new apartment had been cloudy like today, chilly enough for snow.

(*The Hunter* : 94)

- (161) つい数時間前、あの、柿の種のような目をした金井に向かって、もう少しで掴み掛かりそうな顔をしていた滝沢の顔が思い浮かんだ。

(『凍える牙』：314)

She remembered the furious look on Takizawa's face a few hours before when he stood up in Kanai's face.

(*The Hunter* : 166)

- (162) そして、貴子は疲れと緊張で震えそうになる手で、再びエンジンをかけた。

(『凍える牙』：471)

Then, her hands shaking with fatigue and tension, she switched the engine back on.

(*The Hunter* : 246)

- (163) 「女房はこの春、亡くなったんだよ」

「知ってます」

「え? ……」

立花は驚いて、あやうく紅茶をこぼしそうになった。

(『戸隠伝説殺人事件』：172)

“My wife died this spring.”

“Yes, I know.”

“You do?”

Tachibana almost spilled his tea.

(*The Togakushi Legend Murders* : 141)

(156) では、‘be about to’、(158) では ‘be going to’ が用いられているが、「そうになる」は、これらの英語表現よりもはるかに「視覚的・感覚的な勘による刹那的印象」(森田 1986 : 595-596) なのである。この「視覚性」のニュアンスは、‘be going to’ にはないものである。(157) の ‘nearly’ や (163) での ‘almost’ は結果志向表現である。また、(161) の「掴み掛かりそうな」が単に形容詞で英訳され、「変化が生起する直前状態」は全く無視されている。(159) の ‘as if’ は仮定法で述べられているが、仮定法は「視覚的・感覚的な勘」によるものではない。また、(162) では、「～そうな」の個所が、すでに実現した表現になっており、日本語原文との間にかなりのズレがある。

次は、逆に、日本語訳に「～そうだ」が表れている例である。

(164) “No, I don’t,” said Fred, and Horace could tell that Fred was about to cry. ( *Brave Horace* )

「や、やだったら！」フレッドはなきだしそうです。

(『かいじゅうなんか こわくない』)

(165) We climbed mountains so high it seemed as if we would scrape the moon. ( *The Polar Express* )

山も超えた。ものすごく高い山で、ぼくらはもう少しでお月さまをかすめそうだった。(『急行「北極」号』)

(166) Twice he was nearly caught when the ship stopped to take on more cargo. ( *My Father’s Dragon* : 13 )

もっとにもつをつむために、とちゅうのみなとにふねがとまっ

たとき、エルマーは、二どほど、あやうくみつかりそうになりました。  
(『エルマーのぼうけん』：29)

- (167) He almost laughed out loud at the absurdity of it.  
(*The Da Vinci Code* : 183)

あまりの突飛さに、思わず声をあげて笑いそうになった。  
(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』：16)

- (168) A drop of sweat was preparing to slide down Vernet's nose.  
(*The Da Vinci Code* : 211)

汗のしづくがいまにもヴェルネの鼻を流れ落ちそうだ。  
(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』：64)

- (169) As he neared the top, Collet almost lost his footing on a thin rung.  
(*The Da Vinci Code* : 393)

頂上に近づいたとき、細い横木の上で危うく足を滑らせそうになった。  
(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』：97)

- (170) Sophie's eyes looked as if they would well with tears, but they did not.  
(*The Da Vinci Code* : 454)

涙が目からあふれそうだが、こぼれ落ちてはいない。  
(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』：203)

ここでも、(166) の ‘nearly’、(167) (168) の ‘almost’ の結果志向的な表現、(165) (170) の ‘as if’ の仮定法表現が、「～そうだ」と体験的に捉え直されていることが注目されよう。また、(164) の ‘be about to’ が「そうだ」と和訳されているが、これは、先にみた、(156) での日本語原文の「そうだ」が ‘be about to’ と英訳されていることと平行していよう。



#### 4.4 「ところ」

「ところ」については、池上・守屋 (2009 : 118) に、「トコロ」は、「だれか/何かの動きや活動のプロセスのある一瞬を切り取って静止画像のように把握する機能」を有すとし、日本語話者に〈好まれる言い回し〉であるとしている。いわば、一瞬の「見え」を静止画像として捉えた用法であるといえる。「ところ」についても、場面密着の体験的把握であればこそ、一瞬の場面を静止画像にして、把握することが可能になるといえる。

まずは、日本語原文に、「ところ」が用いられている例と対応英語表現とを比べてみよう。

- (171) 「びっくりして、きから おちるところだった!!」りすが いった。  
(『どろんこ おそうじ』 : 16)

“I was so surprised that I nearly fell out of the tree,”  
Squeaky Squirrel says. (*Grandma Baba's Big Clean-up!* : 16)

- (172) いぬは ちょうど ソーセージを たべるところでしたが、それを きいて、あわてて にげだしました。

(『せんたくかあちゃん』 : 6)

Although the dog was just about to sink its teeth into a nice tasty sausage, it jumped to its feet and ran.

(*Sudsy Mom's Washing Spree* : 6)

- (173) グラウンドの方を見ると、ちょうど彼女がボールを投げようと  
しているところだった。  
(『凍える牙』 : 291)

They turned to see her in the act of tossing the ball, her movements unsteady.  
(*The Hunter* : 154)

- (174) ちらりと見上げると、彼女はいつの間にか、例の、ひらがなの  
並んだボードを用意して、笠原に向かって差し出そうとしてい

るところだった。 (『凍える牙』：400)

Glancing up, he saw her offering Kasahara the hiragana board. (The Hunter : 211)

- (175) 笠原は、常に疾風が相手に襲いかかるところを車の中から見守ると、そのまま家に戻っていた。 (『凍える牙』：502-503)

Kasahara observed the attacks from inside his car, and then drove home alone. (The Hunter : 262)

- (176) 私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へはいろいろとするところであった。

(『こころ』：10)

Sensei had just taken his clothes off and was about to go for a swim when I first laid eyes on him in the tea house.

(Kokoro : 3)

- (177) 三原は、つぎつぎと慎重にめくった。さらには五枚目ぐらいのあたりで、彼は思わず、叫び声をあげるところだった。

(『点と線』：168)

He continued checking the forms carefully. He leafed through a few more, and suddenly, he almost cried out in disappointment. It was there! (Points and Lines : 104)

- (178) あっ、と危うく叫ぶところだった。 (『点と線』：187)

He stifled a cry. (Points and Lines : 116)

これらの「ところ」が表す「プロセスのある一瞬を切り取って静止画像のように把握する機能」のニュアンスは、対応する英語訳では十分に表されているとはいえない。もっとも、(172)のように、対応英語表現もほぼ意味が一致したように思えるものもある。しかし、未実現を表す「～るところ」の(173)(174)の対応英語表現では、実現されたもの

として表されている。また、(171) (177) では、‘nearly’ や ‘almost’ が用いられて結果表現になっている。

次は、日本語訳に「ところ」が用いられている例である。

- (179) George tried to run away. He almost did, but he got caught in the telephone wire, ... (Curious George : 36)

じょうーじは、にげようとしてしました。けれども、もうちょっと  
というところで、でんわのコードに ひっかかってしまいました。  
(『ひとまねこぎるときいろいぼうし』: 36)

- (180) The story lady was just beginning a story for the children. (Library Lion)

おねえさんが、こどもたちに おはなしを よみはじめたところでした。  
(『としょかんライオン』)

- (181) ... as the red sun settled over the meadow. (Elmer and the Dragon : 42)

ちょうど、お日さまは、のはらのむこうに、しずむところでした。  
(『エルマーとりゅう』: 74)

- (182) At the front of the car was the Duke of Croydon. For a horror-filled instant, Keycase had an impulse to turn and run. (Hotel : 382)

そのエレベーターの真正面にクロイドン公爵が乗っていた。キーケースは一瞬はっとした。あやうく衝動的に逃げ出すところだった。  
(『ホテル(下)』: 282)

- (183) The last Grail “sighting” had been in 1447 when numerous eyewitnesses described a fire that had broken out and almost engulfed the documents before they were carried to safety in four huge chests that each required six men to carry.

(*The Da Vinci Code* : 183)

最後に「目撃、されたのは一四四七年で、その場に居合わせたお  
おぜいの人間によると、突然の火事で文書は危うく燃えるところ  
だったが、四つの巨大な箱をそれぞれ男が六人がかりで持ち  
あげて、無事に運び出せたという。

(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 17)

- (184) The news story he had been watching was just ending. It didn't matter. (*The Da Vinci Code* : 194)

先刻観ていたニュースがちょうど終わるところだが、差し支え  
はない。

(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 34)

- (185) He walked them to the far wall where a wide conveyor belt entered the room in a graceful curve, vaguely resembling a baggage claim carousel. (*The Da Vinci Code* : 195)

そう言ってふたりを奥へ案内したところ、そこに幅広のコンベ  
ヤーベルトが部屋の外から滑りこんで、ゆるやかな曲線を描い  
ていた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 37)

- (186) She had just turned out the gas under the saucepan of milk when the telephone rang. (*Devices and Desires* : 218)

ソースパンをかけたガスの火を切ったところで、電話が鳴っ  
た。

(『策謀と欲望 (上)』: 286)

(179) (183) では、‘almost’ が用いられた結果表現となっているのは、  
先の日本語原文での「ところ」が almost を用いて英訳された (177) の  
場合と同様である。(181) の英語原文は、すでに日が沈んだものとされ  
ているが、日本語訳では、臨場的に捉えられている。また、(180)  
(186) の英語原文と日本語訳は大方一致するとは思われるが、「ところ」  
の持つ、「時々刻々と変化するだれか/何かの動きのプロセスを輪切り

するような把握のしかた」(池上・守屋 2009: 118) のニュアンスは、対応英語表現にはないと思われる。

#### 4.5 まとめ

これまで、事象の瞬時のプロセスを表す「～かかる/～かける」「～うとする」「～そうだ」「ところ」の日本語と英語を比較対照してみたが、興味深いことは、これらの表現のどれにも、以下のような‘be about to’が用いられた対応表現があるということである。

「～かかる/～かける」

(124) オオカミの わらいごえを きいて、ヤギは おもわず、『オオカミみたいな すごみの ある ひくい おこえで。』と いいかけたが、しつれいだと おもい、くちを とじる。

(『あらしのよりに』)

The goat was just about to say: Your voice sounds like a wolf's, low and gruff. But he thought this might be rude, so he decided against it. (One Stormy Night...)

「～うとする」

(141) でっかいかばを、すっかりあらって、おゆをかけようとしたとき、おふろのなかから、いせいのいいこえがきこえた。

(『おふろだいすき』)

I had scrubbed him thoroughly and was about to wash away the bubbles when we heard a loud voice from the bathtub.

(I Love to Take a Bath : 24)

「～そうだ」

(156) すと一ぶは、いまにも きえそうでした。

(『ねずみのおいしゅさま』: 15)

The stove was about to go out ... (*Dr. Mouse's Mission* : 15)

「ところ」

(172) いぬは ちょうど ソーセージを たべるところでしたが、それを きいて、あわてて にげだしました。

(『せんたくかあちゃん』: 6)

Although the dog was just about to sink its teeth into a nice tasty sausage, it jumped to its feet and ran.

(*Sudsy Mom's Washing Spree* : 6)

このことは、日本語においては、これらの4つの瞬時的な事象のプロセスを表す表現の区別があるが、結果志向の英語では、これらの4つの表現のはっきりした区別はなく、これらの表現と近い意味をもつ 'be about to' が代用されたと考えられる。

要するに、これらの4つの日本語表現が可能なのは、場面に臨場する語り手のみが、現場で進行する事象の一瞬のプロセスの〈見え〉を捉え得ることができるという、日本語の体験的把握の特性が発揮された表現であるということができよう。

また、これらの表現が一瞬の事象のプロセスの把握を表すことについては、先の2節で論じた「燃やしたけど、燃えなかった」の「燃やした」が「燃やす」という事象の一瞬のプロセスしか表していないことと同じように考えてよいと思われる。

## 5 「途中」——「途中」のプロセス体験——

これまで、日本語の体験的把握の観点から日本語のプロセス志向表現についてみてきたが、進行する事象の〈途中〉を表す「途中」という語についても、同じような観点から捉えることが可能であるように思われる。

もっとも、空間的な意味での「場所」を表す「途中」の用法については、英語にも ‘on the way’ や ‘halfway’ のような対応表現があることはいうまでもない。

- (187) 途中寄り道をして目刺しや、大根、人参などを買いこんだ。  
(『塩狩峠』：240)  
On the way he bought some sardines and a large white radish and some carrots, in a side street. (Shiokari Pass : 189)
- (188) “..., and we can have some lunch on the way...”  
 (“The Red-Headed League” *The Adventures of Sherlock Holmes* : 73)  
「……食事は途中でやればよい。……」  
(「赤髪組合」『シャーロック・ホームズの冒険』：64)
- (189) 「あすこの坂の途中に、建ったばかりの家があるでしょう」  
(『雪国』：93)  
“You know the new house halfway up the hill?”  
(*Snow Country* : 97)
- (190) Tucker asked halfway across the parking lot.  
(*Without Remorse* : 216)  
駐車場を突っ切る途中でタッカーがきいた。  
(『容赦なく(上)』：326)

しかし、「途中」には、これらの意味の他に、「(ものごとを) はじめてからおわるまでの間の途中」の時間を表す意味もあり、このような用法においては、「途中」の対応表現が結果志向の英語では把握の対象とはされない場合のほうがはるかに多い。

次の例をみてみよう。

- (191) ……、ま夜中のとうげ道を、えっちら、おっちら、じさまの小屋へのぼってきた。とちゅうで、月がでてるのに、雪がふりはじめた。この冬はじめての雪だ。

(「モチモチの木」『モチモチの木』：74-76)

The doctor trudged up to Grandpa's cottage in the wee hours of the night. Although the moon was still bright, it began to snow. It was the first snowfall of winter.

(*The Tree of Courage* : 25)

- (192) かつこうはたいへんよろこんで途中からかつこうかつこうかつこうかつこうとついて叫びました。

(『セロ弾きのゴーシュ』：24)

The cuckoo was so overjoyed that he joined in loudly with his own cuckoo cuckoo cuckoo cuckoo. (*Gauche the Cellist* : 24)

- (193) テープは途中で切れていた。 (『凍える牙』：98)

The tape ran out while she was still talking.

(*The Hunter* : 55)

- (194) 照子は、ニュースの途中でテレビのスイッチを切ると、その晩は、早々に布団にもぐり込んでしまった。 (『凍える牙』：436)

She switched the news program off before it was over and crawled into bed. (*The Hunter* : 228)

- (195) けさから昨夕の事が気にかかっている私は、途中でまたKを追窮しました。 (『こころ』：233)

I began questioning him again during our walk to the university.

(*Kokoro* : 219)

- (196) 「途中勤めたが長続きせなんだ。今度こそはと思ったがこの始末での。もう主取りは懲りた。」 (「竹光始末」『竹光始末』：51)

"I've held several posts, but none lasted very long. I was



hoping this one would be different, but look what happened.”

(“The Bamboo Sword” *The Bamboo Sword* : 36)

- (197) 「代わりの家政婦なら、いくらでもいる」組合長は私の言葉を途中で遮り、事務機の引き出しを開け、博士の顧客カードをホルダーに差し込んだ。 (『博士の愛した数式』: 166)

“There are plenty of other housekeepers who can look after him,” said the Director, cutting me off. He opened the drawer and filed away the card.

(*The Housekeeper and the Professor* : 106)

- (198) 途中で一度、水を飲み起きると、それっきり目が覚めてしまった。 (『砂の女』: 227)

He awoke completely when he got up for a drink of water.

(*The Woman in the Dunes* : 204-205)

- (194) の英訳の “before it was over” は、典型的な結果志向の表現であり、時の流れに沿った「途中」の概念は無視されているといえる。

次は、「途中」が日本語訳に訳出された例である。

- (199) And, as always, Horace fell asleep before the end. (*Horace*)  
そして、いつものように ホラスは とちゅうで ねむってしまいました。 (『ママとパパを さがしに行くの』)

- (200) Later she sat on the ground in the forest between school and home, ... (The Amazing Bone)  
それから、とちゅうのもりへよって、じめんにすわりました。  
(『ものいうほね』)

- (201) Twice he was nearly caught when the ship stopped to take on more cargo. (My Father's Dragon : 13)

もっとにもつをつむために、とちゅうのみなとにふねがとまったとき、エルマーは、二どほど、あやうくみつかりそうになりました。  
(『エルマーのぼうけん』：29)

- (202) The meeting was breaking up. In contrast to the earlier accord, there was a sense of constraint and awkwardness.

(*Hotel* : 369)

会談は、途中までの和気あいいたる雰囲気が一変して、気まぜい空気の中で終わった。  
(『ホテル(下)』：262)

- (203) As they descended, they passed between two armed Judicial Police guards with machine guns. (*The Da Vinci Code* : 22)

途中、マシンガンを持った警察官ふたりのあいだを通り抜けた。  
(『ダ・ヴィンチ・コード(上)』：40)

- (204) ‘She dropped her bouquet as we went towards the vestry.’  
 (“Noble Bachelor” *The Adventures of Sherlock Holmes* : 281)

「いっしょに控え室のほうへさがる途中でヘティは花束をとり落しました。」

(「花嫁失踪事件」『シャーロック・ホームズの冒険』：291)

- (205) ‘Good-night,’ called Miss Baker from the stairs ...

(*The Great Gatsby* : 14)

「おやすみ」階段の途中からミス・ベイカーが声をかけた。

(『グレート・ギャツビー』：35)

- (206) ...; they walked and climbed for a week, until Rowden had to leave suddenly on some family business.

(*Good-bye, Mr. Chips* : 19)

一週間ほど、歩いたり、登山したりしたが、ラウデンは、家庭に急用が起きたので、途中から帰らなければならなくなった。

(『チップス先生さようなら』：21)

ここでも、(199)での結果志向の表現である‘before the end’が、プロセス体験が明示された「途中」と日本語訳されていることが注目されよう。

影山 (2002 : 12) は、「英語は行為や出来事の境界、すなわち最終的な局面を重視する言語であり、他方、日本語は、最終的な結果よりむしろ途中の過程に着目する言語である」(下線部筆者)と述べているが、この「途中の過程に着目する言語」の表れのひとつが、英語と比べての「途中」という語の多用に表れているということはできないだろうか。

また、このことに関しては、次の例の主体移動表現における日本語と英語の容認性の差に通じるところがあるように思われる。すなわち、(207a) (208a) のようなハイウェイのような通行可能な経路の場合は、英語も日本語も主体移動表現が可能であるが、(207b) (208b) の電線のように経路が通行不可能な場合は、英語の主体移動表現は可能だが、日本語の場合それが基本的に不可能であるとの指摘がある。

(207) a. The highway {goes/runs/meanders/zigzags/proceeds} through the desert.

b. The wire {goes/runs/meanders/zigzags/?proceed} through the desert.

(208) a. そのハイウェイは平野の真ん中を {走っている/行く/通って行く}。

b. その電線は平野の真ん中を {通る/\*行く/??通って行く}。

(中村 2004 : 44)

このことについて、中村 (2004 : 44) は、「英語の場合Dモードだとする

と、視点は外にあるから視線が経路を走ればよいから、通行不可能な経路でも主体移動表現が可能になる。日本語の場合、Iモードだとすると、認知主体は仮想上でも状況内になるため、通行が不可能な経路については、主体移動表現が困難になる」とし、「結論的には、語り手がいわば状況内に身を置くようにして描写するためと言ってよいであろう」としている。

「途中」の語についても、いわば、状況内に身をおいて、時の流れに沿っての事象の「途中」を体験するところから用いられうる表現と考えることは可能であると思われる。とすれば、「途中」の語も、本稿で論じてきたプロセス志向表現の観点から捉えることも可能となろう。

## 6 結び — 「道」とプロセス志向 —

これまで、日本語のプロセス体験志向表現と英語の結果分析志向表現を対比してきた。まず、「始める」「～出す」といった開始のプロセスや、「続く」「ぞくぞくと」「ている」のような進行・継続のプロセスそのものを表す語については、英語にも対応表現はあるが、日本語のほうがはるかに多く用いられているを見た。一方、「～かかる/かける」「～ようとする」「～そうだ」といった、「未実現から実現に移行する一瞬のプロセス」や「実現する直前のプロセス」を表す表現については、英語にはこれらと1対1で対応する表現が存在しないことを見てきたが、それは、これらの「実現する直前の一瞬のプロセス」といった事象は、まさに、現場に臨場する話し手が、感覚的・体験的にしか把握できない性質によるものであり、結果分析志向の英語では、これらの瞬時のプロセスの事象が、把握できないためであることをみた。また、「途中」という語も、事象の「途中」を体験することから、日本語においては、英語よりも、より多く用いられることをみてきた。結局、これらの場面密着の臨場的スタンスによる体験的なプロセス表現も、日本人の「好ま

れる言い回し」とみなしうることができよう。

熊谷高幸(2011)は、『日本語は映像的である』において、日本語の「映像的」な性質について論じているが、本稿で論じてきた〈見え〉の対象としてのプロセス表現は「視覚的」なものともいえるので、当然、「映像的」な性質のものであるということになる。一方、牧野(1978, 1996)は日本文化の「視覚性」について論じているが、この観点からみるならば、本稿で論じてきた「視覚的」なプロセス体験志向表現も、日本文化の「視覚性」の表れの一つとして位置付けることも可能となろう。さらに、この「視覚性」は、「見えの共有が共感、すなわち感情的な経験の共有感につながる」(本多2005:204)、「日本語は、見えの体験の共有により、共感を形成する言語である」(尾野2014:67)とする日本語表現の「共感性」につながることに become と思われる。

また、臨場する語りの場においては、進展する事象の一瞬は、一瞬の「今」と共に、絶えず更新されて、果てしなく続くことになり、このことが、野村(2002)のいう〈連続体スキーマ志向〉としての日本語につながることに become と考えられる。時が更新されるにつれ、事象も更新されることが、先に論じたように「続く」の語の多用につながることに become するのである。事象が「続く」「ている」として把握されるのは、あくまで、先が見えない「場面内視点」での〈今〉の一瞬を焦点にしうる「体験的把握」であればこそである。

ちなみに、「道」は、日本人に好まれるイメージであるが、これは、「道」がどこまでも「続く」ものであるからであり、また、道を絶えず歩み続けることが事象を体験的に把握するプロセス体験志向と重なり合い<sup>11)</sup>、この体験志向が共感志向にもつながるからであると思われる。(このことについては、先の(1)の例で示したように、日本語の「運動」や「行為」の動詞が指向性を表すだけで必ずしも達成や到達を含意しないという特徴(池上1981:288)も関わっているとも考えられる。)

尾野 (2012 : 55) でも触れたことであるが、ザ・ブロード・サイド・フォーの『若者たち』(1966) の歌詞にある「君の行く道ははてしなく遠い、君の行く道は希望へと続く」の「はてしなく続く道」のイメージには、一瞬の今の更新を絶えず体験していく、日本語と日本人のプロセス体験志向へのこだわりがよく表われているといえるかもしれない<sup>12)</sup>。「今」が絶えず、更新されていくことが、「道」の〈無界的〉なイメージにつながっているのである。

## 注

- 1) Ikegami (2005 : 158) にも、以下の記述がある。

I am now inclined to think that this markedly “unbounded” orientation of Japanese verbs of action has also something to do with the prominence of subjectivity in Japanese — that is, if the speaker emphathizes with (or places himself in the position of) the person about to start doing something, he does not know at that moment whether or not he can successfully achieve his intended goal.

- 2) Langacker (2008) は、概念化者 (Conceptualizer) の事象の処理活動が行われる時間を processing time (処理時間) とし、現実の時間にそって事象が把握される時間を conceived time (把握時間) としたが、濱田は、日本語のように知覚と認識が同時に生じる場合は、conceived time (把握時間) と processing time (処理時間) が同時であり、英語のように知覚と認識が同時に生じない場合は、conceived time (把握時間) と processing time (処理時間) が分離していると述べている (Hamada 2014 : 19)。これらの用語を本稿のコンテキストにおいて用いるとすれば、日本語表現の「プロセス体験志向」は、conceived time (把握時間) と processing time (処理時間) の同時性から生じるということになる。
- 3) もちろん、本稿でとりあげた表現のみが、日本語におけるプロセス志向

表現のすべてでないことはいうまでもない。ちなみに、「開始体験」を表す語としては、「てきた」(鈴木 2008)もこの中に加えられると思われる。

- 4) 「始める」と 'begin', 'start' は、対応する場合は多いとは先に述べたが、どのような場合に対応しないのかという問題が残されている。これは、今後の課題といえるが、例文の (13) (19) の「見え始めた」のような、視覚による把握の場合には、日英語表現に違いが表れやすいとはいえそうである。
- 5) 尾野 (1990: 17) は、英語の進行形の特徴を、「基準時においてのみ成立しうる現実世界 (現象) に対する話者の観察 (描写) 行為を表す」としたが、この言い方に従えば、日本語の「ている」については、「発話時における現実世界 (現象) に対する話者の観察行為を表す」ということになるであろうか。(もっとも、このことについては、更なる考察が必要とされることはいうまでもない。) つまり、英語の進行形とテイルの差は、進行形においては、「基準時においてのみ成立しうる」の制約があるのであるが、日本語にはこの制約がないということである。

では、なぜ、英語にはこの制約があり、日本語にはないのかということになる。まず、「場面外視点」の英語においては、観察行為が行われるためには、語り手は、事象と同じ現場にいる「場面内視点」に移行する必要があるが、観察行為が可能となる状況は、観察される事象が「一時性」を表す場合である。つまり、「一時的」なものは、いつかは、その事象が終結することになり、それ故に、観察に値する対象となるのである。一方、日本語は、そもそも、「場面内視点」の言語であるため、場面内で生じている事象であればすべて観察可能となり、「基準時においてのみ成立しうる」の但し書きは必要ないということになる。すなわち、日本語のすべての発話は、「語りの現場という基準時」における発話であるということである。つまり、英語の進行形は、「基準時においてのみ成立しうる」外部の事象に対する客観的な観察であるが、「ている」は、「基準時における」外部の事象に対する主観的な語り手の「観

察・確認」体験ということである。「ている」が日本語でひんぱんに用いられるのは、日本語においては、基準時が絶えず推移していくため、基準時における、事象に対する「観察・確認」行為が求められるためとも考えられよう。

また、「ている」形と「る」形の違いに関しては、西田 (2005) が次の (i) の例に対し、以下の興味深い考察をしている。

- (i) 菊池序光 (生没年不詳) 江戸時代後期の装剣金工。菊池序克になまび、のちに養子となって菊地家 2 代目をつぐ。柳川派の手彫りにすぐれる。江戸神田にすむ。本姓は中山。通称は伊予衛門。

この用例については、話し手が「当該状態についての全ての知識を持ち」(西田 2005 : 1)、「現実の時間の流れから離れて成り立つ状態」(西田 2005 : 5) であるとしている。すなわち、話し手は、この文脈の「場面内視点」にはいないため、よって、観察行為を表す「テイル」は使用できないということになる。

- 6) もっとも、進行形と「ている」形の表す内容は全く同じというわけではないと思われる。宗宮 (2012 : 36) は、「活動動詞の「泳いでいる」なども、英語のように終点のある活動の持続と見るのではなく、泳いでいるという状態の連続とみる。状態であるため、終点の含意はない。つまり、時間の流れが意識されない。」と述べている。

しかし、英語の「進行形」と日本語の「ている」の違いについては、英語の「進行形」は客観的な「観察行為」だけであるのに対し、日本語の「ている」には、「観察行為」に加えて、話し手の心理的な「確認体験」の意味合いも加わっているということができるとと思われる。

- 7) この「雨」に対する日本人の思い入れは、ドナルド・キーンが日本映画での「雨」のシーンについて述べた次のような感想と重なるものであろう。「橋は劇的で、雨は長いと、相場が決まっていた。映画に橋の場面が出てくると、必ず恋人が出逢ったり別れたりする。しまいには、橋を見た瞬間に「あ、これからなにかあるぞ」と、身構えるようにさえなっ



た。また、日本のカメラマンは長々と雨のシーンを写した。しとすと雨が降り、水たまりが出来、さらにそこへ雨が降り込む。日本人が雨に万斛の思い入れをするのが、よくわかった。」(ドナルド・キーン (1979) 『日本文学のなかへ』文藝春秋 p.33)。

- 8) 「テイタ」が表す「余剰性」についての中村(1991)の见解は、牧野(1996: 68-69)による。
- 9) もっとも、副島は、「つつある」は「客観的」としているが、これは、「体験的」ともいうべきものと思われる。
- 10) これは、田中西二郎訳(1953)だが、鴻巣友季子訳(2003)では、「医者の見立てに反して、わたしはみるみる体力を回復している。」と訳されている。
- 11) 「道」については、Ikegami(1989: 399)でも、次のように、論じられている。

What matters is the process of constantly endeavouring to improve and not the achievement of a goal set beforehand. The notion of 'Way', in fact, has long been given this philosophical connotation in the traditional Japanese arts.

- 12) もちろん、「続く」と「道」のフレーズがある歌は、『若者たち』だけではない。「続く続く 明日も続く 銀色の はるかな道」のフレーズのあるダークダックスの『銀色の道』(1966)もその一つであろう。もっとも、「続く道」のフレーズのある歌詞は限りないと思われる。

## 参考文献

- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- Ikegami, Y. 1989. "Homology of Language and Culture: A Case Study in Japanese Semiotics" in Koch, W.A. (ed.), *The Nature of Culture*, Brockmeyer, 388-403.
- Ikegami, Y. 2005. "Indices of a 'Subjectivity-Prominent' Language —Between Cognitive Linguistics and Linguistic Typology" *Annual*

- Review of Cognitive Linguistics* 3, 132-164.
- 池上嘉彦. 2005. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)」『認知言語学論考 No.4 2004』1-60, ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2009. 「人文学研究における作業仮設としての〈相同性〉」『英文学研究 支部統合号』第2巻, 421-435.
- 池上嘉彦・守屋三千代(編). 2009. 『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2011. 「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』49-67, ひつじ書房.
- 尾野治彦. 1990. 「進行形についての覚え書き — be going to と will の比較に関連して —」『函館英文学』29号, 15-35.
- 尾野治彦. 2008a. 「絵本における日英語の推移表現の比較 —〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の観点から —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第40号, 37-99.
- 尾野治彦. 2008b. 「〈臨場的スタンス〉がとる推移的表現について — 絵本における英訳との対比を通して —」『日本語用論学会・第10回大会発表論文集』第3号(2007), 343-346.
- 尾野治彦. 2011. 「「S1 と、S2」と「やがて」における「体験性」をめぐって — 対応する英語表現と比較して —」『英文学研究 支部統合号』第3巻, 29-46.
- 尾野治彦. 2012. 「〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって — 対応する英語表現との対比の観点から —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第44号, 1-59.
- 尾野治彦. 2014. 「日本語の体験的把握に表れる〈視覚性〉〈感覚・感情性〉〈共感性〉 — 対応する英語表現との対比の観点から —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第46号, 1-83.
- 影山太郎. 2002. 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- 熊谷高幸. 2011. 『日本語は映像的である』新曜社.
- 定延利之. 2006. 「心内情報の帰属と管理 — 現代日本語共通語「ている」のエ

- ビデンシャルな性質について一』『言語に現れる「世間」と「世界」』  
167-192, くろしお出版.
- 鈴木基伸. 2008. 「知覚マーカーとしての「てきた」について」『日本言語学会  
第136回大会 予稿集』128-133.
- 宗宮喜代子. 2012. 『文化の観点から見た文法の日英対照』ひつじ書房.
- 副島健作. 2007. 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.
- 中村明. 1991. 『文章をみがく』NHK ブックス.
- 中村芳久. 2004. 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論II  
(シリーズ認知言語学入門第5巻)』3-51, 大修館書店.
- 西田光一. 2005. 「恒常の状態を表す日本語動詞の語用論的分析」『語用論研  
究』第7号, 1-15.
- 野村益寛. 2002. 「〈液体〉としての言葉 日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」『認知言語学II：カテゴリー化(シリーズ言語科学3)』37-57, 東京大学出版会.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 牧野成一. 1978. 『ことばと空間』東海大学出版会.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学』アルク.
- 森田良行. 1986. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 濱田英人. 2011. 「言語と認知 — 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現  
—」『函館英文学』第50号, 65-100.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar A Basic Introduction*.  
Oxford University Press.

## 資料

### 日本語原文のもの

- 乃南アサ. 1996. 『凍える牙』新潮文庫.  
*The Hunter*. Juliet Winters Carpenter(tr.). 2006. Kodansha International.

- 安部公房. 1981. 『砂の女』新潮文庫.  
*The Woman in the Dunes*. E. Dale Saunders(tr.). 1991. Vintage International.
- 内田康夫. 1985. 『戸隠伝説殺人事件』角川文庫.  
*The Togakushi Legend Murders*. David J. Selis(tr.). 1994. Tuttle Publishing.
- 遠藤周作. 1986. 『侍』新潮文庫.  
*The Samurai*. Van C. Gessel(tr.). 1997. New Directions Classic.
- 大岡昇平. 1952. 『野火』新潮文庫.  
*Fires on the Plain*. Ivan Morris(tr.). 2001. Tuttle Publishing.
- 大塚勇三 (作)・丸木俊 (絵). 1964. 『うみのがくたい』福音館書店.  
*The Ocean-Going Orchestra*. Sarah Ann Nishié(tr.). 2006. ラボ教育センター.
- 大塚勇三 (再話)・赤羽末吉 (絵). 1967. 『スーホの白い馬』福音館書店.  
*Suho's White Horse*. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 小川洋子. 2005. 『博士の愛した数式』新潮文庫.  
*The Housekeeper and the Professor*. Stephen Synder(tr.). 2009. Picador.
- 川端康成. 1947. 『雪国』新潮文庫.  
*Snow Country*. Edward G. Seidensticker(tr.). 1956. Vintage International.
- きむらゆういち (作)・あべ弘士 (絵). 1994. 『あらしのよるに』講談社.  
*One Stormy Night...* Lucy North(tr.). 2003. Kodansha International.
- きむらゆういち (作)・あべ弘士 (絵). 2001. 『あるはれたひに』講談社.  
*One Sunny Day...* Lucy North(tr.). 2003. Kodansha International.
- 斎藤隆介 (作)・滝平二郎 (絵). 1995. 『モチモチの木』岩崎書店.  
*The Tree of Courage*. Sako Laughlin(tr.). 2007. アールアイシー出版.
- さとうわきこ. 1978. 『せんたくかあちゃん』福音館書店.

- Sudsy Mom's Washing Spree*. Sako Laughlin(tr.). 2005. アールアイシー出版.
- さとうわきこ. 1986. 『どろんこおそうじ』福音館書店.
- Grandma Baba's Big Clean-up!* Richard Carpenter(tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- しみずみちを(作)・山本まつ子(絵). 1972. 『はじめてのおるすばん』岩崎書店.
- Ding-Dong!* Sako Laughlin(tr.). 2008. アールアイシー出版.
- 筒井頼子(作)・林明子(絵). 1986. 『とん ことり』福音館書店.
- Gifts from a Mailbox*. Jaylene Mory・Susan Howlett(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 筒井頼子(作)・林明子(絵). 1977. 『はじめてのおつかい』福音館書店.
- Miki's First Errand*. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. アールアイシー出版.
- 筒井頼子(作)・林明子(絵). 1983. 『いもうとのにゅういん』福音館書店.
- Naomi's Special Gift*. Laylene Mory・Susan Howlett(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 中川李枝子(作)・大村百合子(絵). 1967. 『そらいろのたね』福音館書店.
- The Sky Blue Seed*. Sarah Ann Nishié(tr.). 2004. ラボ教育センター.
- 中川李枝子・山脇百合子. 1966. 『ぐりとぐらのおきゃくさま』福音館書店.
- Guri and Gura's Surprise Visitor*. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- 中川正文(作)・山脇百合子(絵). 1974. 『ねずみのおいしゃさま』福音館書店.
- Dr. Mouse's Mission*. Mia Lynn Perry(tr.). 2007. アールアイシー出版.
- 中川李枝子(作)・山脇百合子(絵). 1992. 『ぐりとぐらとくるりくら』福音館書店.
- Guri and Gura's Magical Friend*. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.
- なかやみわ. 1999. 『それまめくんとめだかのこ』福音館書店.

- Big Beanie and the Lost Fish*. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- なかやみわ. 1999. 『そらまめくんのベッド』福音館書店.
- Big Beanie's Bed*. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 夏目漱石. 1951. 『こころ』角川文庫.
- Kokoro*. Edwin McClellan(tr.). 1969. Tuttle Publishing.
- 新美南吉(作)・黒井健(絵). 1988. 『手ぶくろを買いに』偕成社.
- Buying Mittens*. Judith Carol Huffman(tr.). 1999. University of Hawai'i Press.
- 乃南アサ. 1996. 『凍える牙』新潮文庫.
- The Hunter*. Juliet Winters Carpenter(tr.). 2006. Kodansha International.
- 松岡享子(作)・加古里子(絵). 1970. 『とこちゃんはどこ』福音館書店.
- Where is Little Toko?*. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 松岡享子(作)・林明子(絵). 1982. 『おふろだいすき』福音館書店.
- I Love to Take a Bath*. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 松居直(作)・長新太(絵). 1966. 『ぴかくん めをまわす』福音館書店.
- Sid the Signal*. Richard McNamara(tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 松本清張. 1971. 『点と線』新潮文庫.
- Points and Lines*. Makiko Yamamoto and Paul C. Blum(tr.). 1986. Kodansha International.
- 三浦綾子. 1973. 『塩狩峠』新潮文庫.
- Shiokari Pass*. Bill and Sheila Fearnough(tr.). 1987. Tuttle Publishing.
- 宮沢賢治. 1992. 『銀河鉄道の夜 (*Night Train to the Stars*)』John Bester (tr.). 講談社英語文庫.
- 宮沢賢治. 1996. 『英語で読む銀河鉄道の夜 (*Night on the Milky Way Train*)』ロジャー・パルバース(訳). ちくま文庫.
- 宮沢賢治. 1998. 『セロ弾きのゴーシュ』*Gauche the Cellist*. Roger

- Pulvers(tr.). ラボ教育センター.
- 星新一. 1972. 「博士とロボット」『きまぐれロボット』角川文庫.  
“The Doctor and the Robot” *The Capricious Robot*. Robert Matthew(tr.). 1986. 講談社インターナショナル.
- 藤沢周平. 1981. 「竹光始末」『竹光始末』新潮文庫.  
“The Bamboo Sword.” *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
- 藤沢周平. 1985. 「驟り雨」『驟り雨』新潮文庫.  
“A Passing Shower” *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
- やなせたかし. 1975. 『やさしいライオン』フレーベル館.  
*The Gentle Lion*. Shauna Rosgen(tr.). 2008. アールアイシー出版.

#### 英語原文のもの

- Allsburg, C.V. 2009. *The Polar Express*. Andersen Press.  
『急行「北極号」』村上春樹 (訳). 2003. あすなろ書房.
- Branley, F.B. (text) & Keller, H. (illustration). 1963. *Snow is Falling*. HarperCollins Publishers.  
『あっ！ ゆきだ』高橋庸哉 (訳). 2008. 福音館書店.
- Brontë, E. 1847. *Wuthering Heights*. Penguin Classics.  
『嵐が丘』田中西二郎 (訳) 1953. 新潮文庫.  
『嵐が丘』鴻巣友季子 (訳) 2003. 新潮文庫.
- Brown, D. 2003. *The Da Vinci Code*. Doubleday.  
『ダ・ヴィンチ・コード (上) (中) (下)』越前敏弥 (訳). 2006. 角川文庫.
- Burton, V.L. 1942. *The Little House*. Houghton Mifflin Company.  
『ちいさいおうち』いしいももこ (訳). 1965. 岩波書店.
- Buscaglia, L. 1982. *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.  
『葉っぱのフレディ』みらいなな (訳). 1998. 童話屋.
- Clancy, T. 1994. *Without Remorse*. Berkley Books.

- 『容赦なく(上)』村上博仁(訳). 1996. 新潮文庫.
- Cook, T.H. 2004. *Into the Web*. Bantam Books.
- 『蜘蛛の巣のなかへ』村松潔(訳). 2005. 文春文庫.
- Dole, C. 1892. “The Red-Headed League” *The Adventures of Sherlock Holmes*. Penguin Books.
- 「赤髪組合」『シャーロック・ホームズの冒険』延原謙(訳). 1953. 新潮文庫.
- Dole, C. 1892. “Noble Bachelor” *The Adventures of Sherlock Holmes*. Penguin Books.
- 「花嫁失踪事件」『シャーロック・ホームズの冒険』延原謙(訳). 1953. 新潮文庫.
- Fitzgerald, F.S. 1993. *The Great Gatsby*. Wordsworth Classics.
- 『グレート・ギャツビー』野崎孝(訳). 1974. 新潮文庫.
- Freeman, D. 1957. *Fly High Fly Low*. The Viking Press.
- 『とんで とんで サンフランシスコ』やましたはるお(訳). 2005. BL出版.
- Freeman, D. 2005. *Earl the Squirrel*. The Viking Press.
- 『子リスのアール』やましたはるお(訳). 2006. BL出版.
- Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration). 1948. *My Father's Dragon*. Yealing Books.
- 『エルマーのぼうけん』わたなべしげお(訳). 1963. 福音館書店.
- Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration). 1951. *The Dragons of Blueland*. Yealing Books.
- 『エルマーと16ぴきのりゅう』わたなべしげお(訳). 1977. 福音館書店.
- Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration). 1977. *Elmer and the Dragon*. Yealing Books.
- 『エルマーとりゅう』わたなべしげお(訳). 1977. 福音館書店.
- Hailey, A. 1966. *Hotel*. Bantam Books.
- 『ホテル(上)(下)』高橋豊(訳). 1974. 新潮文庫.



- Hailey, A. 1976. *The Moneychangers*. Bantam Books.  
『マネーチェンジャーズ (上) (下)』永井淳 (訳). 1978. 新潮文庫.
- Hendry, D (text) & Chapman, J (illustration). 2001. *The Very Busy Day*. Little Tiger Press.  
『チビねずくんのあつ〜いいちにち』くぼしまりお (訳). 2001. ポプラ社.
- Hilton, J. 1934. *Good-bye, Mr. Chips*. Coronet Books.  
『チップス先生さようなら』菊池重三郎 (訳). 1956. 新潮文庫.
- James, P.D. 1989. *Devices and Desires*. Faber and Faber.  
『策謀と欲望 (上) (下)』青木久恵 (訳). 1999. ハヤカワ文庫.
- Krauss, R (text)& Simont, M (illustration). 1949. *The Happy Day*. Harper-Collions.  
『はなを くんくん』きじまはじめ (訳). 1967. 福音館書店.
- Keller, H. 1989. *The Best Present*. Greenwillow Books.  
『いちばんすてきなプレゼント』あかぎかんこ・あかぎかずまさ (訳). 2001. ポプラ社.
- Keller, H. 1991. *Horace*. Greenwillow Books.  
『ママとパパを さがしにいくの』すえよしあきこ (訳). 2000. BL 出版.
- Keller, H. 1998. *Brave Horace*. Greenwillow Books.  
『かいじゅうなんか こわくない』すえよしあきこ (訳). 2002. BL 出版.
- Keller, H. 2002. *Farfallina & Marcel*. Greenwillow Books.  
『ファルファリーナとマルセル』河野一郎 (訳). 2006. 岩波書店.
- Knudsen, M (text) & Hawkes, K (illustration). 2006. *Library Lion*. Candlewick Press.  
『としょかんライオン』福本友美子 (訳). 2007. 岩崎書店.
- Lionni, L. 1963. *Swimmy*. Dragonfly Books. Alfred A. Knoph.  
『スイミー』谷川俊太郎 (訳). 1969. 好学社.
- Lionni, L. 1967. *Frederick*. Dragonfly Books. Alfred A. Knoph.  
『フレデリック』谷川俊太郎 (訳). 1969. 好学社.
- Lionni, L. 1969. *Alexander and the Wind-Up Mouse*. Alfred A. Knoph.

- 『アレクサンダとぜんまいねずみ』谷川俊太郎 (訳). 1975. 好学社.
- Lobel, A. 1971. *Frog and Toad Together*. Harper Trophy.
- 『ふたりはいっしょ』三木卓 (訳). 1972. 文化出版局.
- Lucas, D. 2004. *Halibut Jackson*. Alfred A. Knoph.
- 『カクレンボジャクソン』なかがわちひろ (訳). 2005. 偕成社.
- Lucas, D. 2007. *The Robot and the Bluebird*. Andersen Press.
- 『ロボットとあおいことり』なかがわちひろ (訳). 2007. 偕成社.
- Lucas, D. 2008. *The Lying Carpet*. Andersen Press.
- 『ほらふきじゅうたん』なかがわちひろ (訳). 2009. 偕成社.
- McCloskey, R. 1941. *Make Way for Ducklings*. The Viking Press.
- 『かもさんおとおり』わたなべしげお (訳). 1965. 福音館書店.
- McMenemy, S. 2005. *Jack's New Boat*. Walker Books.
- 『ジャックのあたらしいヨット』石井睦美 (訳). 2005. BL 出版.
- Rey, H.A. 1941. *Curious George*. Houghton Mifflin Company.
- 『ひとまねござるときろいぼうし』光吉夏弥 (訳). 1966. 岩波書店.
- Steig, W. 1976. *The Amazing Bone*. A Sunburst Book.
- 『ものいうほね』せたていじ (訳). 1978. 評論社.
- Steig, W. 2003. *When Everybody Wore a Hat*. Harper Trophy.
- 『みんなぼうしをかぶってた』木坂涼 (訳). 2004. セーラー出版.
- Steinbeck, J. 1992. *The Grapes of Wrath*. Penguin Classics.
- 『怒りの葡萄 (上) (下)』大久保康雄 (訳). 1967. 新潮文庫.
- Trivizas, E (text) & Oxenbury, H. (illustration). 1993. *The Three Little Wolves and the Big Bad Pig*. Aladdin Paperbacks.
- 『3びきのかわいいオオカミ』こだまともこ (訳). 1994. 富山房.
- Twain, M. 1986. *The Adventures of Tom Sawyer*. Penguin Classics.
- 『トム・ソーヤーの冒険』大久保康雄 (訳). 1953. 新潮文庫.
- Varley, S. 1984. *Badger's Parting Gifts*. Lothrop, Lee & Shepard Books.
- 『わすれられない おくりもの』小川仁央 (訳). 1986. 評論社.
- Williams, G. 1958. *The Rabbits' Wedding*. HarperCollins.

『しろいうさぎとくろいうさぎ』まつおかきょうこ (訳). 1965. 福音館書店.

Zoehfeld, K.W. (text) & Hale, J.G. (illustration). 1995. *How Mountains Are Made*. HarperCollins.

『山は生きている』神鳥統夫 (訳). 2002. リブリオ出版.

Zolotow, C. (text) & Hoban, T. (picture). 1993. *The Moon Was the Best*. Greenwillow Books.

『パリのおつきさま』みらいなな (訳). 1993. 童話屋.